

コミュニティ協議会による武蔵野市のコミュニティづくりについて —現状と展望—

(第五期武蔵野市コミュニティ評価委員会報告書)

第五期武蔵野市コミュニティ評価委員会

第五期武蔵野市コミュニティ評価委員会

目次

はじめに	1
第1章 評価の目的と流れ	2
1. 武蔵野市コミュニティ評価委員会の役割	2
2. 評価・考察について	3
(1) 評価・考察の目的・視点	3
(2) 評価・考察の基準	4
(3) 評価・考察の対象	4
(4) 評価・考察の方法	5
(5) 評価委員会の構成	7
第2章 利用者アンケート及び無作為抽出アンケート結果	8
(1) 利用者アンケート調査結果	8
(2) 無作為抽出アンケート調査結果	11
第3章 各コミュニティ協議会の現状の取組み等	21
第4章 総評	51
1. 全体に共通する事項について	52
(1) コミュニティ協議会に対する市民の理解	52
(2) コミュニティ協議会運営のあり方について	53
(3) 人材の確保について	54
(4) コミュニティ協議会同士の情報共有	55
2. 行政に対する提言について	56
3. 市民への提言について	57
資料編	58
1. 議論の経過	58
2. 各コミュニティ協議会の概況	59

はじめに

第五期武蔵野市コミュニティ評価委員会は、武蔵野市コミュニティ条例（平成13年12月武蔵野市条例第33号。以下「条例」という。）に基づき、武蔵野市長より委嘱を受け、コミュニティ協議会（以下「協議会」という。）のコミュニティづくりについて評価を行うために設置された。

武蔵野市では、昭和46年にコミュニティ構想が提起されて以来、50年以上にわたり、ボランティアの住民による公共的団体である協議会により、自律的・自発的にコミュニティづくりが行われてきた。一方で、特に新型コロナウイルス感染症のまん延は、それまでのコミュニティづくりに大きな困難を与えたが、コミュニティの大切さを再確認させる機会ともなった。市民のライフスタイルの変化等協議会を取り巻く状況は大きく変化してきている。このようななかで、各協議会によるコミュニティづくりを継続・発展させるには協議会自身の取組みはもちろん、市民や行政も今以上にコミュニティづくりを意識する必要がある。

こうしたことを踏まえ、各協議会がその活動に自信をもって取り組んでいけるように、本報告書では各協議会の特筆すべき取組みを記載し、また、全ての協議会に共通する事項について、さらには各協議会に対してだけではなく行政と市民に対しても提言を行うこととした。

本報告書が各コミュニティ協議会のさらなる発展のみならず、武蔵野市のコミュニティの活性化につながることを期待する。

第1章 評価の目的と流れ

1. 武蔵野市コミュニティ評価委員会の役割

武蔵野市では、昭和46年の第一期基本構想・長期計画においてコミュニティ構想を提起し、市民の自発的なつながりによるコミュニティづくりを推進してきた。このコミュニティづくりにおいて中心的な役割を担っているのが、16の協議会である。

各協議会は、市内に19館（分館等を含む。）あるコミュニティセンター（以下「コミセン」という。）をそれぞれ管理運営し、コミセンを活動拠点として市民による自主三原則（自主参加、自主企画、自主運営）に基づきそれぞれが独自性をもってコミュニティづくりに取り組んでいる。

一方、近年では、地域課題も複雑化・多様化しており、福祉、子育て支援、青少年健全育成、防犯・防災、環境、まちづくり等の幅広い分野で、市民が自主的に行う活動や市民と行政とが連携や協働により行う取組みがより一層求められている。

こうしたなかで、コミュニティづくりや地域課題への取組みにおいて、地域住民のボランティアによる協議会は非常に重要な役割を果たしている。その一方で、協議会は担い手不足の課題、担い手の意識の変化とやりがいの維持、地域におけるネットワークの構築及び協議会によるコミュニティづくりを基礎とする武蔵野市独自のコミュニティのあり方についての認知度のさらなる向上など、様々な課題に直面している。また、協議会が管理運営するコミセンがこれまでと同様又はそれ以上に市民活動の拠点としてその機能を果たせるよう、管理運営者である協議会の取組みについて評価を行い、より効果的な施設運営や取組みの発展につなげていくことが求められている。

こうした状況を踏まえ、武蔵野市では、条例に基づいて、各協議会の施設運営や事業内容について体系的に評価し、広く市民及び市長に対する説明責任を果たすとともに、施設運営や事業内容をより一層向上していくことを目的として、第五期武蔵野市コミュニティ評価委員会（以下「評価委員会」という。）を設置した。

評価委員会では、条例にある「財政援助を行った公共的団体のコミュニティづくりについて評価するため」という目的について、まず本委員会が行う評価とは何であるのかについて議論した。そして、ここでの評価とは全ての協議会を一律の枠組みに当てはめて数値などによって一元的に評価するというような狭い意味での評価ではないことを確認した。本委員会における評価とは、各協議会が活動する地域のあり方や活動の経緯などを踏まえ、かつ、地域住民の働き方や世帯構成、年齢構成などの変化や価値観の変化などの社会変化を考慮した上で、各協議会における取組みの現状と課題を把握するとともに、その実践が持続性をもってコミュニティづくりに資するものとなっているかを考察し、活動を応援するとともに、ときには必要な助言を付与するものであると整理している。そのうえで、評価という言葉が当事者にとっては活動を採点されるようなイメージを持つことを考慮し、本報告書では「評価」という言葉を単独では用いず、「考察」、ないしは、「評価・考察」と表現するが、条例から引用の文言を使用する場合は「評価」

とする。

この評価委員会での評価活動を介して、各協議会によるコミュニティづくりの状況を広く市民に公開することで、より開かれた運営となることを目指すとともに、今後も、コミセンを拠点としたコミュニティづくりの活動が進展するよう、各協議会の活動を多くの市民へ周知することを目的とするものである。また、この評価活動を通して、各協議会が、日々の活動とコミセンの管理運営の振り返りを行うとともに、他の協議会による取組みを参考にして互いに学び合い、高め合う機会とすることも大きな狙いとなっている。

2. 評価・考察について

(1) 評価・考察の目的・視点

武蔵野市では、昭和46年に定めた第一期基本構想・長期計画以来、市民自治を掲げ、市民施設のネットワーク計画とコミュニティ構想により、「多世代が集う地域の居場所」、「地域における市民活動の拠点」としてコミセンを整備してきた。コミセンはそれぞれの地域の住民が組織する協議会によって管理運営が行われており、協議会はコミセンを拠点として、自主三原則（自主参加・自主企画・自主運営）に基づき自主活動としてのゆるやかなコミュニティづくりを進めている。

こうした協議会の活動は、コミセンの管理運営と相まって、市民の自主性を高める市民自治のまちづくりの要として位置付けられており、各種自主事業等の個々の活動についてはそれぞれの協議会の自主に委ねられている。同時に、平成17年より武蔵野市では指定管理者制度に基づいて協議会にコミセンの管理運営を委託しており、市は委託者として協議会が適切に管理運営を行っているかを検証する必要がある。

そのため、本評価委員会の目的の第一は、協議会の取組みが客観性・透明性をもって適切に行われていることを確認するとともに、協議会の活動の意義を広く周知することによって、協議会とコミセンが市民活動の要として一層開かれたものとなることである。目的の第二は、各協議会が評価委員会による評価活動を通じて自らの取組みを振り返り、また他の協議会の状況を知ることによって、新たな気づきや学びにつながり、今後の活動の発展に資することである。

以上の目的を踏まえ、本委員会は以下5つの視点をもって、各協議会の活動について、考察を行った。

- ① 運営の工夫・利用者（住民）の満足度の向上
- ② 地域におけるネットワーク機能
- ③ 持続可能な協議会の運営
- ④ 適正な運営
- ⑤ 施設・設備の管理

(2) 評価・考察の基準

各協議会が独自の工夫を重ねているコミュニティづくりとコミセンの運営を中心として、以下の項目を基準とした。

図表 1 評価・考察の基準

評価・考察の視点	基準の内容
① 運営の工夫・利用者（住民）の満足度の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・ 利用者への配慮と適切な対応 ・ 施設の利用方法の工夫（施設の特徴を生かした活用） ・ 多様な利用者への配慮 ・ 情報の提供（情報提供、情報発信の工夫）
② 地域におけるネットワーク機能	<ul style="list-style-type: none"> ・ 利用者・利用団体とコミセンとのつながりづくり（利用者とコミセン、利用者同士） ・ ネットワーク拡大に向けた工夫 ・ 地域とコミセンのつながりづくり（利用団体以外とのネットワーク） ・ 子どもの居場所としての機能
③ 持続可能な協議会の運営	<ul style="list-style-type: none"> ・ 運営委員・協力員の人材充実（人材確保・育成の取組み、多様な参加方法への取組み） ・ 持続可能な事業の実施 ・ 情報の提供（情報提供、情報発信の工夫）
④ 適正な運営	<ul style="list-style-type: none"> ・ 会則や利用の決まりに沿った公平な運営、個人情報の保護 ・ 事業計画に沿った運営
⑤ 施設・設備の管理	<ul style="list-style-type: none"> ・ 異常時の市への連絡・報告 ・ 防災・防犯、防火の取組み

(3) 評価・考察の対象

本評価委員会での考察対象は次の16協議会である。

1. 吉祥寺東コミュニティ協議会	2. 本宿コミュニティ協議会
3. 吉祥寺南町コミュニティ協議会	4. 御殿山コミュニティ協議会
5. 本町コミュニティセンター協議会	6. 吉祥寺西コミュニティ協議会
7. 吉祥寺北コミュニティ協議会	8. けやきコミュニティ協議会
9. 中央コミュニティ協議会	10. 西久保コミュニティ協議会
11. 緑町コミュニティ協議会	12. 八幡町コミュニティ協議会
13. 関前コミュニティ協議会	14. 西部コミュニティ協議会
15. 境南コミュニティ協議会	16. 桜堤コミュニティ協議会

(4) 評価・考察の方法

評価・考察を行うにあたっては、毎年度各協議会で実施している自己点検評価の結果や、以下のとおり実施した、利用者アンケート調査、無作為抽出市民アンケート調査並びに視察及び意見交換会を参考とした。

図表 2 利用者アンケート調査の実施概要

調査の概要					
【調査対象】					
各コミュニティセンターの利用者					
【調査内容】					
(1) 回答者属性					
性別、年齢、住まい					
(2) 利用状況					
利用頻度、利用目的、利用人数					
(3) 事業への参加状況及び意向					
コミュニティセンター主催・共催事業への参加経験、今後の参加意向					
(4) コミュニティセンターの運営に対する認識					
コミュニティセンター運営者に対する理解					
(5) サービス・運営への満足度					
窓口対応、公平な運営、情報発信、総合的な使い心地					
(6) コミュニティづくりへの意見					
コミュニティセンターがどのような場所であるべきか					
【調査方法】					
各コミセンにて利用者に直接配布、回収ボックスでの回収					
【調査時期】					
令和6年6月14日～8月22日（緑町コミセン及び西部コミセンは工事のため7月上旬まで）					
【回収状況】					
①吉祥寺東	272件	②本宿	211件	③吉祥寺南町	177件
④御殿山	206件	⑤本町	572件	⑥吉祥寺西	40件
⑦吉祥寺北	121件	⑧けやき	255件	⑨中央	336件
⑩西久保	267件	⑪緑町	57件	⑫八幡町	133件
⑬関前	202件	⑭西部	41件	⑮境南	201件
⑯桜堤	68件				

図表 3 無作為抽出市民アンケート調査の実施概要

調査の概要
【調査対象】
住民基本台帳から無作為抽出により満15歳以上の男女2500人を抽出

【調査内容】**(1) 回答者属性**

性別、年齢、職業、世帯構成、居住地区、居住年数、普段の情報収集の方法

(2) 地域との関わり

近所住民との近所づきあいの程度、「地域」のイメージ、地域との関わりについての今後の意向、「地域」をよりよくするためにあると良いつながり

(3) 地域コミュニティ活動について

地域コミュニティへの参加状況、現在参加している地域コミュニティ活動の団体、参加したきっかけ、参加している地域コミュニティ活動が抱えている課題、コロナ禍を経た変化、(現在、地域コミュニティ活動に参加していない層の)地域コミュニティ活動への関心の有無及びその理由、地域コミュニティ活動に参加しやすくなるために必要なこと

(4) コミュニティセンターについて

コミュニティセンターの認知度、コミュニティセンターが地域住民によって運営されていることの認知度、利用しているコミュニティセンター、コロナ禍を経たコミュニティセンターの利用の変化、コミュニティセンターの運営面に携わった経験、コミュニティセンターを利用していない理由、コミュニティセンターに求める機能・役割、コミュニティセンターに求める空間や設備、コミュニティセンターの企画・運営への関心意向

【調査方法】

郵送配布、郵送又はインターネット上の回答フォームより回収

【調査時期】

令和6年6月14日～7月31日

【回収状況】

984票/2,500票 (回収率: 39.4%)

図表 4 視察の実施概要

全17施設(中町集会所含む。)を対象に、施設・設備の特徴や課題、コミュニティ活動との関係性などを確認することを目的に、評価委員によるコミセンの視察を実施した。

意見交換会	概要			
第1回 6月9日	①境南	9:00~9:45	②西部	9:55~10:30
	③桜堤	10:40~11:05	④関前	12:30~13:10
	⑤八幡町	13:15~13:50	⑥緑町	13:55~14:20
	⑦けやき	14:45~15:15	⑧吉祥寺北	15:25~15:55
	⑨吉祥寺南町	16:15~17:05		
	第2回 6月29日	①西久保	9:30~10:20	②中町集会所
③中央		10:50~11:30	④吉祥寺西	11:45~12:30
⑤御殿山		13:45~14:25	⑥本宿	14:45~15:25
⑦吉祥寺東		15:35~16:10	⑧本町	16:25~17:00

図表 5 意見交換会の実施概要

全 16 協議会との意見交換会の実施にあたって、事前調査票（コミュニティセンター及びコミュニティ協議会の良い点、コミュニティづくり、施設の運営、協議会の運営等）を配布し、各コミュニティ協議会から事前に回答を得た。当日は、その事前調査票に基づいて、評価委員と各協議会との意見交換を行った。

意見交換会の会場は各コミセンを基本とし、評価委員会が巡回して行った。なお、協議会の希望や施設改修中等の事情により、境南・西部・桜堤は市民会館にて、緑町・八幡町・けやきは市役所にて実施した。

視察	概要			
第1回 9月13日	①本宿	9:30~10:10	②吉祥寺東	10:30~11:10
	③御殿山	11:40~12:10	④吉祥寺南町	13:15~14:00
	⑤西久保	14:20~15:00	⑥境南	15:20~15:50
	⑦西部	16:00~16:40	⑧桜堤	16:50~17:35
第2回 9月14日	①緑町	9:30~10:20	②けやき	10:25~11:10
	③中央	11:20~12:05	④関前	13:10~13:50
	⑤八幡町	14:05~14:45	⑥本町	15:15~16:00
	⑦吉祥寺西	16:20~17:05	⑧吉祥寺北	17:15~18:00

(5) 評価委員会の構成

本評価委員会は次の7名の委員から構成される。

委員長	渡邊 大輔	(成蹊大学文学部教授)
副委員長	町田 敏	(武蔵野市コミュニティ研究連絡会会長)
委員	小山 弘美	(関東学院大学社会学部教授)
委員	高橋 淳子	(武蔵野市コミュニティ研究連絡会副会長)
委員	青木 滋夫	(公募委員)
委員	木村 古州美	(公募委員)
委員	毛利 悦子	(武蔵野市市民部市民活動担当部長)

第2章 利用者アンケート及び無作為抽出市民アンケート結果

(1) 利用者アンケート調査結果

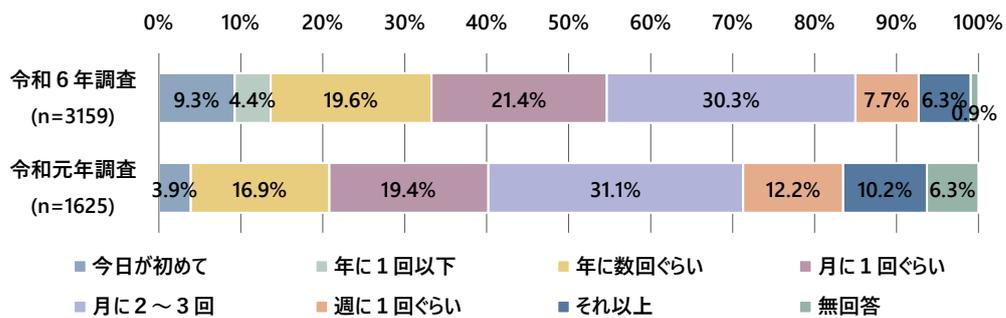
各コミセンの利用者を対象に①施設運営や事業内容について、「参加状況や意向」「利用者へサービス・対応」「運営者への理解」「運営に対する思いやニーズ」の観点から満足度を把握するとともに、今後のコミセンに求める機能について利用者より意見を収集した。

コミセンの利用状況については、以下のようにコロナ禍を経て全体的にコミセンの利用の頻度や行事への参加頻度は少なくなったものの満足度は高いことが示されている。

● コミュニティセンターの利用頻度【令和元年調査比較】

令和元年と比較すると、週に1回以上利用する層が減少し、「今日が初めて」などの利用頻度の少ない利用者が増加している。

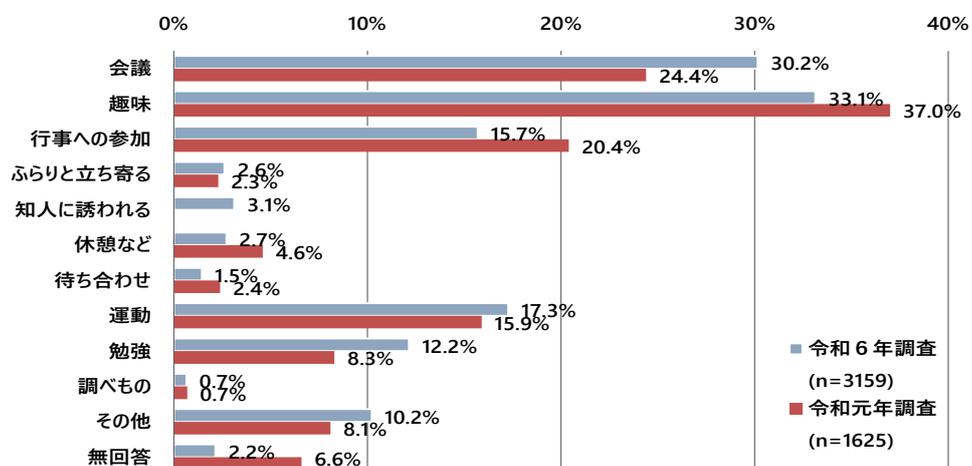
図表 6 コミュニティセンターの利用頻度（単一回答／令和元年調査比較）



● コミュニティセンターを利用する用件【令和元年調査比較】

「趣味」「会議」「運動」の割合が高い。令和元年の調査と比較して、「会議」「勉強」の割合が増加し、「趣味」や「行事への参加」の割合が減少している。

図表 7 コミュニティセンターを利用する用件（複数回答／令和元年調査比較）

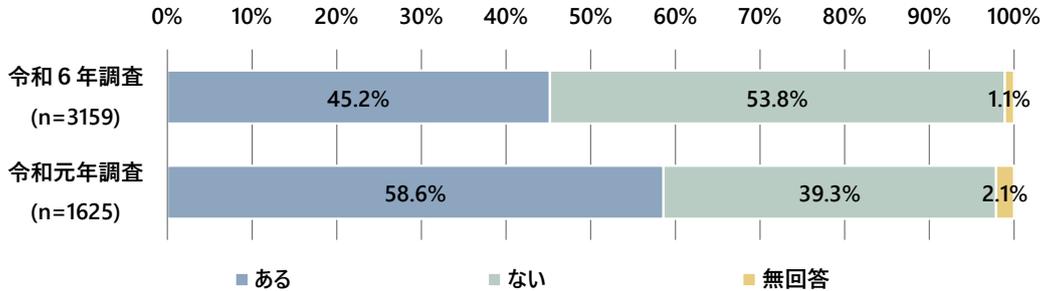


注釈)「知人に誘われる」は令和6年より設定している選択肢である。

● コミュニティセンターが主催・共催している行事への参加経験【令和元年調査比較】

参加したことのある割合は、令和元年から大きく減少し、全体の半数程度となっているが、また参加したい割合は8割を超えている。

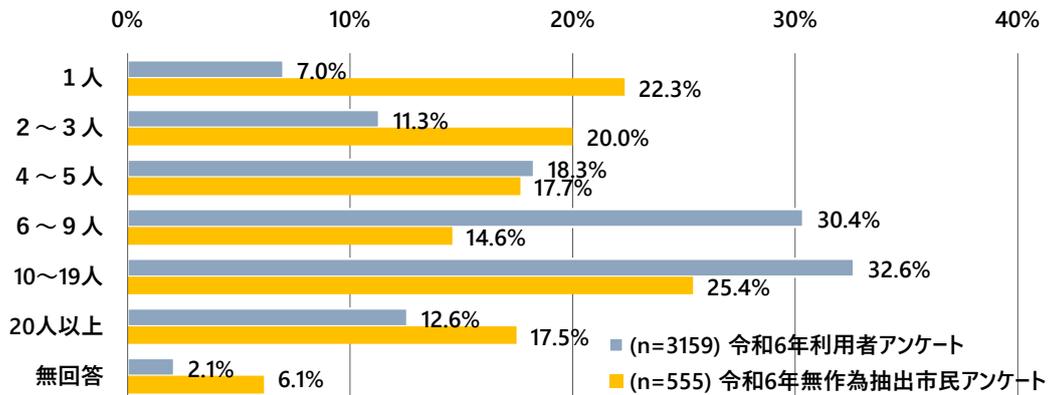
図表 8 コミュニティセンターが主催・共催している行事への参加経験（単一回答／令和元年調査比較）



● コミュニティセンターを利用する際の集まりの規模【利用者・無作為調査比較】

比較的大人数で利用される場合が多くなっており、無作為抽出市民アンケートの傾向と異なるが、これはコミセンの団体利用の際に、積極的に利用者アンケートの調査依頼を行っているためではないかと思われる。

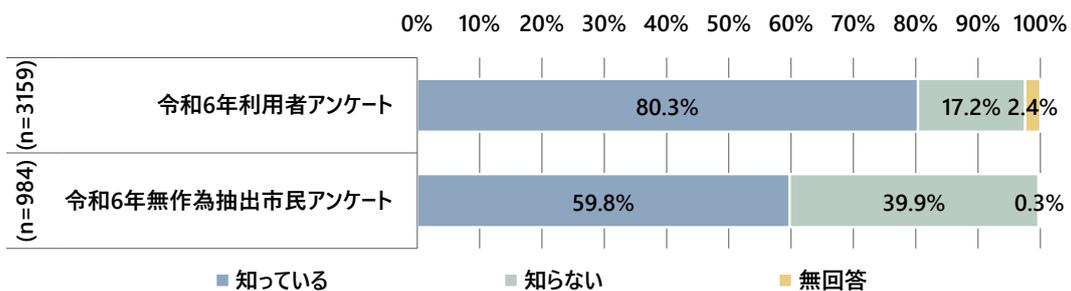
図表 9 コミュニティセンターを利用する際の集まりの規模（複数回答／利用者・無作為比較）



● コミセンが地域住民によって運営されていることの認知度【利用者・無作為調査比較】

知っている割合は8割を超え、無作為抽出市民アンケートと比較して高い。

図表 10 コミセンが地域住民によって運営されていることの認知度（単一回答／利用者・無作為比較）



● コミュニティセンターの運営に対する思いやニーズ

「窓口では質問、問い合わせなどに適切に対応している」「誰でも公平に利用できるように心がけて運営されていると思う」との回答は8割程度で、協議会によるコミセンの管理運営は肯定的な評価を得ている。また、「事業内容や利用方法などの情報が伝わっているか」や「利用者の意見を行事や運営に反映してくれていると思うか」、「総合的なコミュニティセンターの使いごち」についてもおおむね肯定的な評価となっている。

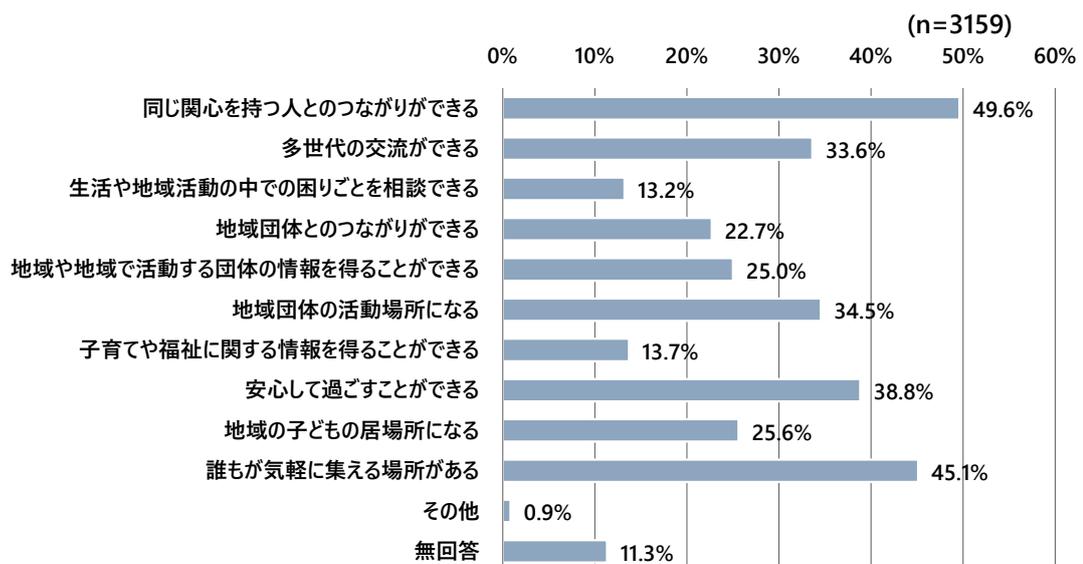
図表 11 コミュニティセンターの運営等について（肯定的回答まとめ）

		令和6年度の肯定的回答割合
①	窓口では、質問、問い合わせなどに適切に対応しているか	適切 59.5% / どちらかといえば適切 22.0% 計 81.5%
②	事業内容や利用方法など、コミセン委関する情報は伝わっているか	そう感じる 30.0% / どちらかといえばそう感じる 35.2% 計 65.2%
③	誰でも公平に利用できるように心がけて運営されていると思うか	そう思う 54.9% / どちらかといえばそう思う 24.8% 計 79.7%
④	利用者の意見を行事や運営に反映してくれていると思うか	そう思う 33.5% / どちらかといえばそう思う 32.9% 計 66.4%
⑤	総合的なコミセンの使いごち	よい 52.3% / どちらかといえばよい 20.7% 計 73.0%

● コミュニティづくりを活発化するために、コミュニティセンターがどのような場所であることが望ましいと思うか

「同じ関心を持つ人とのつながりができる」と「誰もが気軽に集える場所がある」の割合が高い。

図表 12 コミュニティづくりを活発化するためには、コミュニティセンターはどのような場所であることが望ましいか（複数回答／令和6年調査）



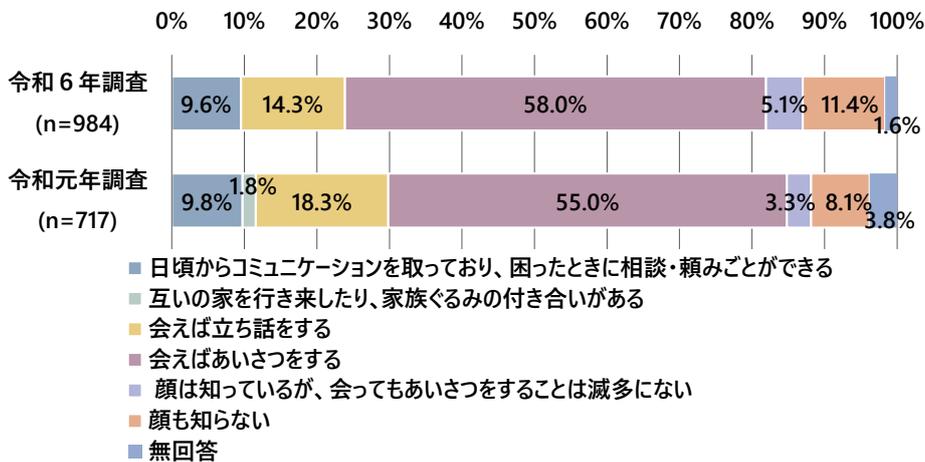
(2) 無作為抽出市民アンケート調査結果

評価委員会の考察の実施にあたって、地域コミュニティに関する意識やコミセンの認知度及びそこでの活動の現状等を把握し、地域コミュニティの拠点であるコミセンに、今後どのような機能・役割が必要かを検討する際の基礎資料とすることを目的として、無作為に抽出した武蔵野市民2,500名に対し、「地域コミュニティについての市民アンケート調査」を実施した。アンケート調査結果の概要は以下に示すとおりである。

● 近隣住民との近所づきあいの程度【令和元年調査比較】

「会えばあいさつをする」の割合が6割弱と高い一方、令和元年と比較すると「会えば立ち話をする」の割合が減少し、「会えばあいさつをする」「顔は知っているが、会ってもあいさつをすることは減多にない」「顔も知らない」の割合が高まっており、軽い付き合いが多くなっている。

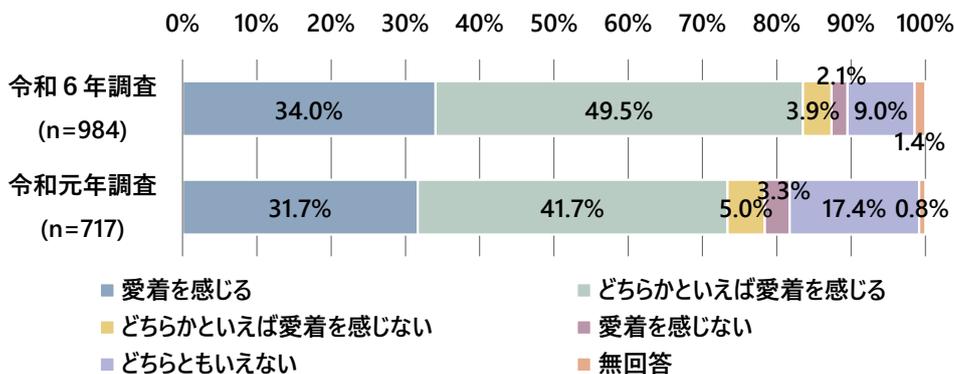
図表 13 近隣住民との近所づきあいの程度（単一回答／令和元年調査比較）



● 「地域」に対して愛着を感じているか【令和元年調査比較】

愛着を感じるという割合は8割を超え、「地域」との関わりについての今後の意向でも半数以上がポジティブな回答であり、令和元年と比較して肯定的回答割合が高まっている。

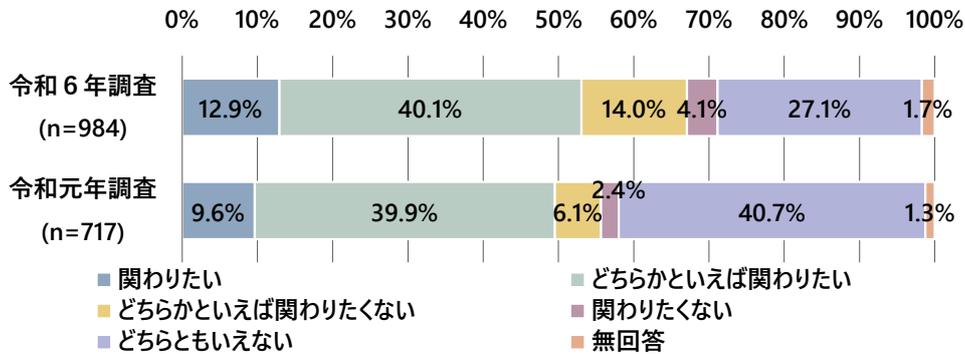
図表 14 「地域」に対して愛着を感じているか（単一回答／令和元年調査比較）



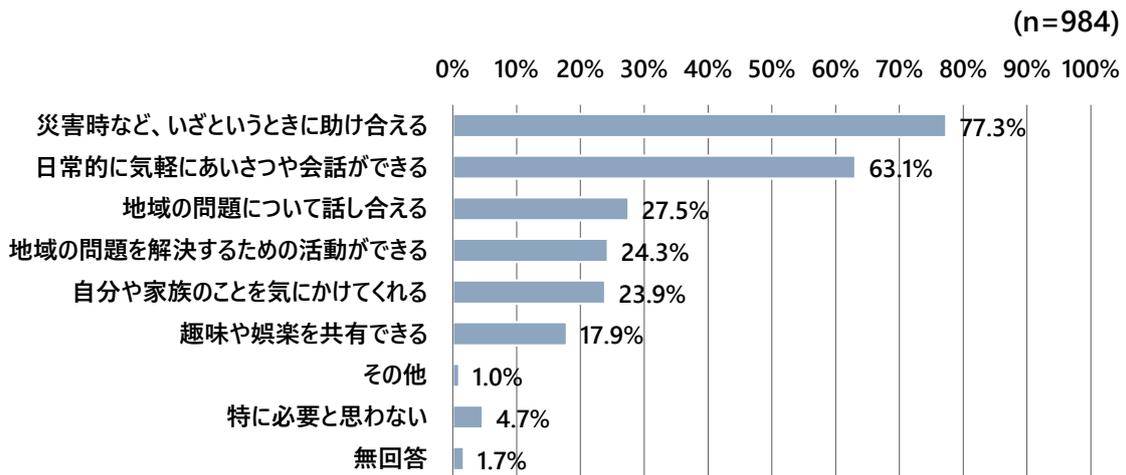
● 「地域」との関わりについての今後の意向【令和元年調査比較】

「災害時など、いざというときに助け合える」「日常的に気軽にあいさつや会話ができる」といったつながりへのニーズが高く、「災害対策・防災活動」「地域防犯・治安に関する活動」への関心が比較的高いことが示唆された。

図表 15 「地域」との関わりについての今後の意向（単一回答／令和元年調査比較）



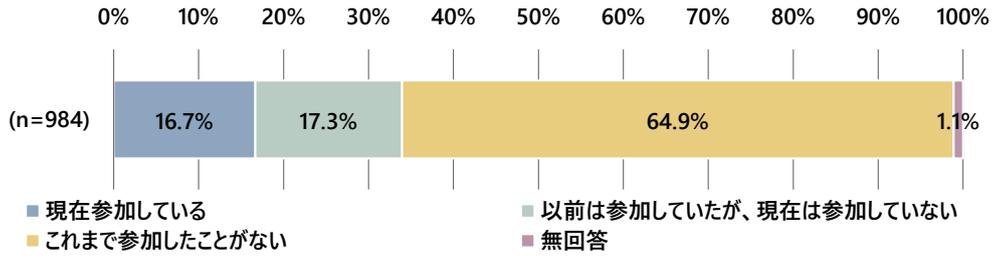
図表 16 「地域」をより良くするために、どのようなつながりがあると良いと思うか（複数回答／令和6年調査）



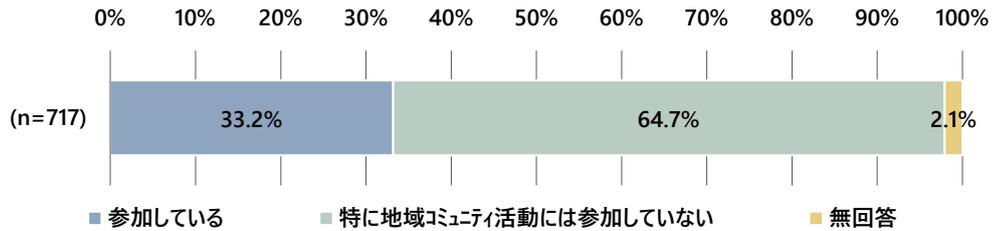
● 地域コミュニティ活動への参加状況【令和元年調査比較】

参加しているという割合は令和元年調査に比べ大幅に減少している。これは選択肢を令和元年調査に比べて一部変更したことによる影響も考えられる。地域への関わりについては関わりたいとの回答が令和元年調査に比べて増えていることから、関心はあるが参加はしていないという状況がより顕著になっていると考えられる。

図表 17 地域コミュニティ活動への参加状況（単一回答／令和6年調査）



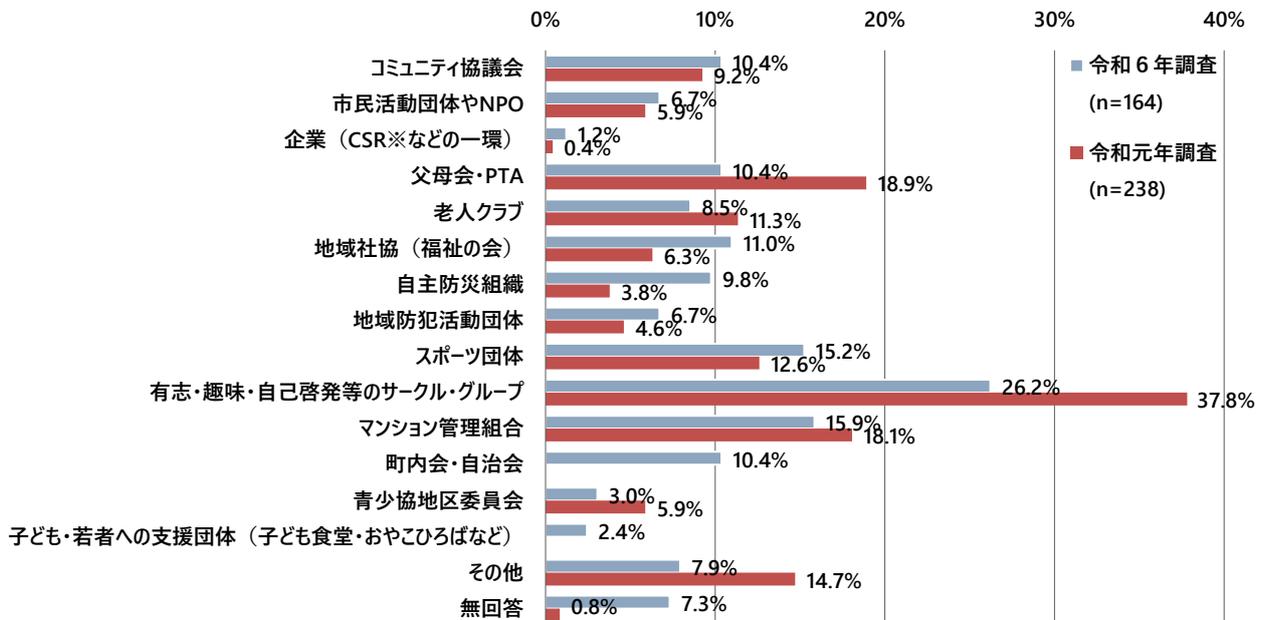
図表 18 地域コミュニティ活動への参加状況（単一回答／令和元年調査）



● 現在参加している地域コミュニティ活動の団体【令和元年調査比較】

「有志・趣味・自己啓発等のサークル・グループ」や「マンション管理組合」の割合が高く、ニーズの高かったつながりである防災・防犯分野の団体への参加割合は相対的に高くない。ただし、令和元年調査と比較すると、「有志・趣味・自己啓発等のサークル・グループ」「父母会・PTA」の割合が大幅に減少している一方で、「自主防災組織」「地域社協（福祉の会）」の割合が増加している。

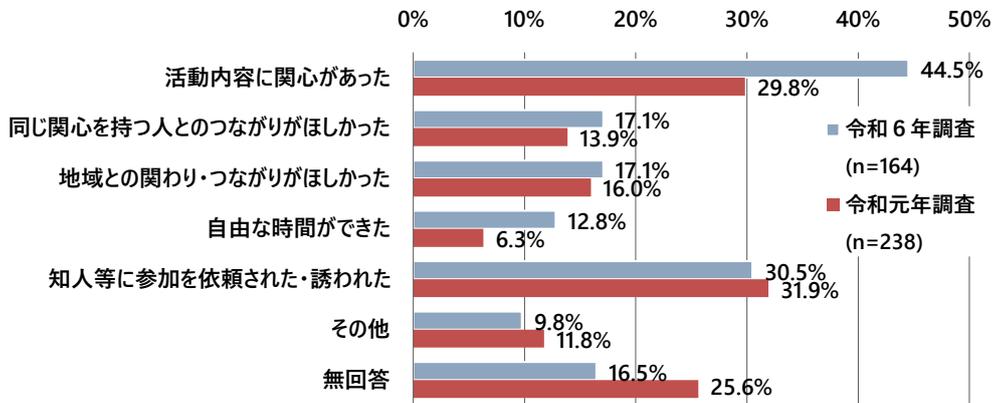
図表 19 現在参加している地域コミュニティ活動の団体（複数回答／令和元年調査比較）



● 地域コミュニティ活動に参加した「きっかけ」【令和元年調査比較】

「活動内容に関心があった」が4割超で最も高く、「知人等に参加を依頼された・誘われた」が3割程度で次に高くなっており、前者の割合は、令和元年から大きく高まった。

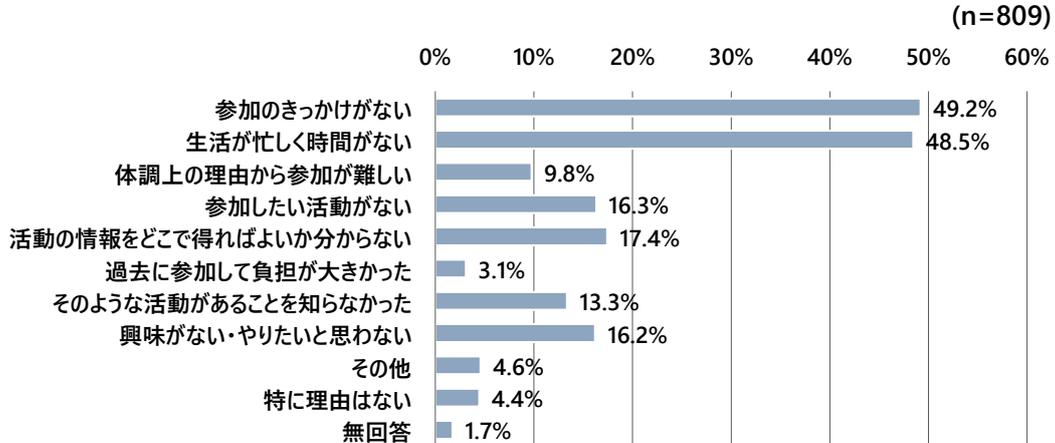
図表 20 地域コミュニティ活動に参加した「きっかけ」(複数回答/令和元年調査比較)



● 現在、地域コミュニティ活動に参加していない理由

「参加のきっかけがない」「生活が忙しく時間がない」の割合が高い。

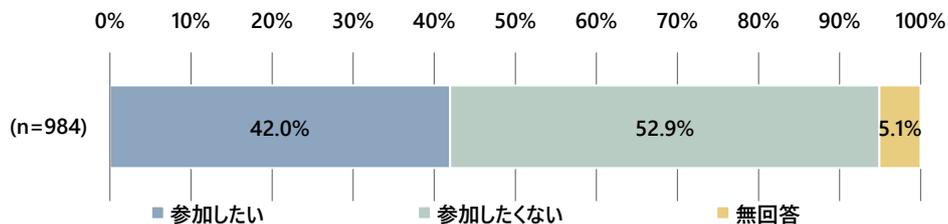
図表 21 現在、地域コミュニティ活動に参加していない理由(複数回答/令和6年調査)



● 今後新しく地域コミュニティ活動に参加したいか

「参加したくない」が「参加したい」を上回った。

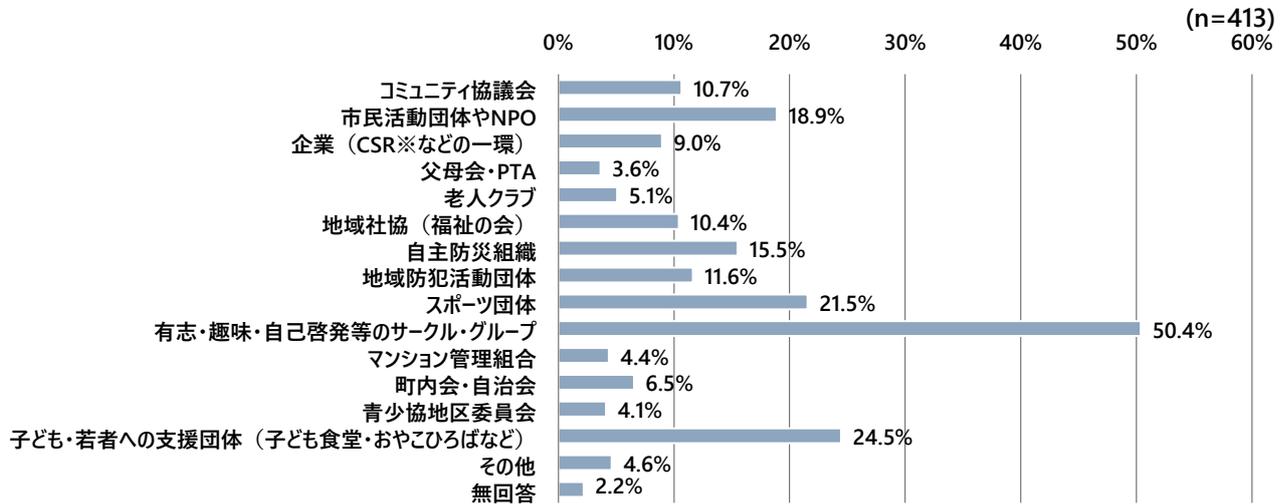
図表 22 今後新しく地域コミュニティ活動に参加したいか(単一回答/令和6年調査)



● 今後参加したい地域コミュニティ活動の団体

「有志・趣味・自己啓発等のサークル・グループ」や「子ども・若者への支援団体（子ども食堂・おやこひろばなど）」の割合が高い（現在の参加有無に限らず全員が回答）。

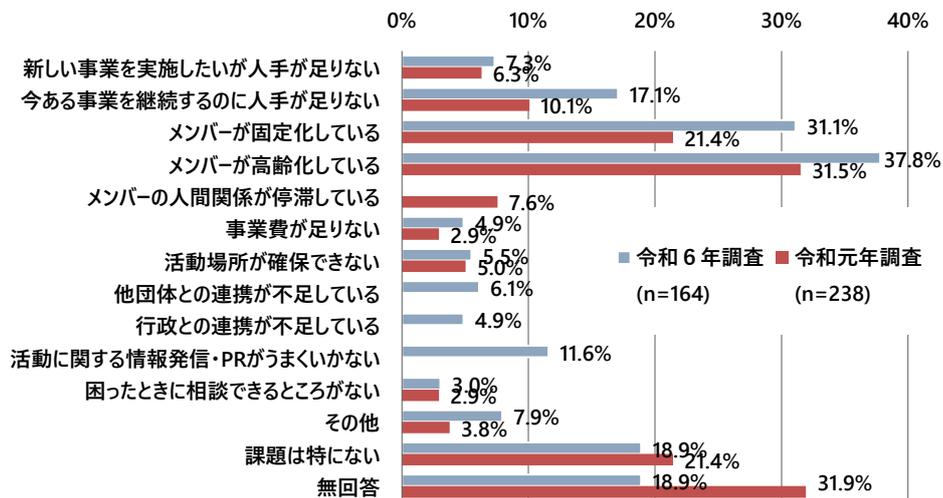
図表 23 今後参加したい地域コミュニティ活動の団体（複数回答／令和6年調査）



● 参加している地域コミュニティ活動が抱えている課題【令和元年調査比較】

「メンバーが高齢化している」「メンバーが固定化している」を挙げる割合が高い。これは令和元年と同様の傾向ではあるが、より割合が高くなっている。

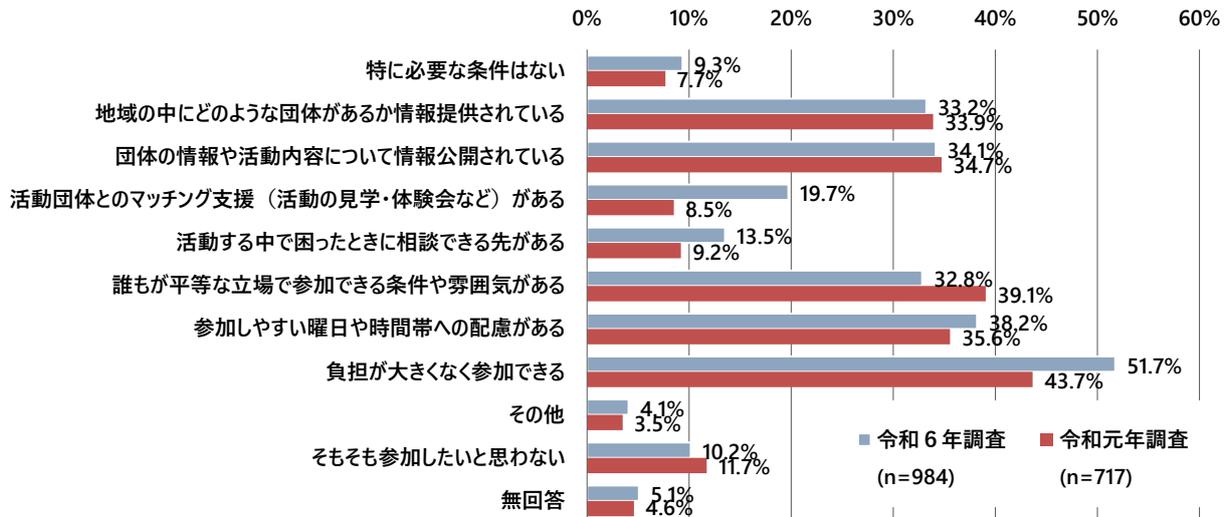
図表 24 参加している地域コミュニティ活動が抱えている課題（複数回答／令和元年調査比較）



● 地域コミュニティ活動に参加しやすくなるためにあるとよい条件【令和元年調査比較】

「負担が大きくなり参加できる」「参加しやすい曜日や時間帯への配慮がある」の割合が高い。なお令和元年は、2番目に回答割合が高かったものは「誰もが平等な立場で参加できる条件や雰囲気がある」であった。

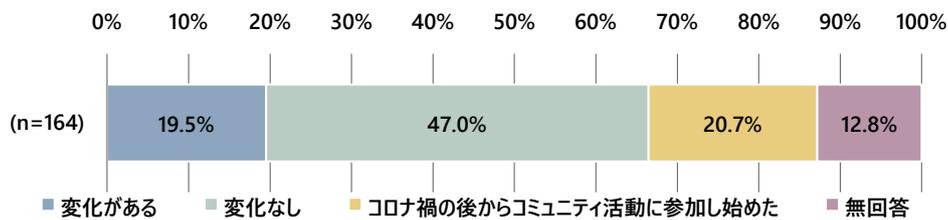
図表 25 地域コミュニティ活動参加しやすくなるためにあるとよい条件（複数回答／令和元年調査比較）



● コロナ禍前と現在での活動の変化

コロナ禍前と現在で活動が変化すると回答したのは2割弱で、具体的な内容として活動の減少、活動者の減少や関係性の希薄化、活動における制限の強化（人数や回数等）、活動・運営方法の変化（電子化等）が挙げられた。

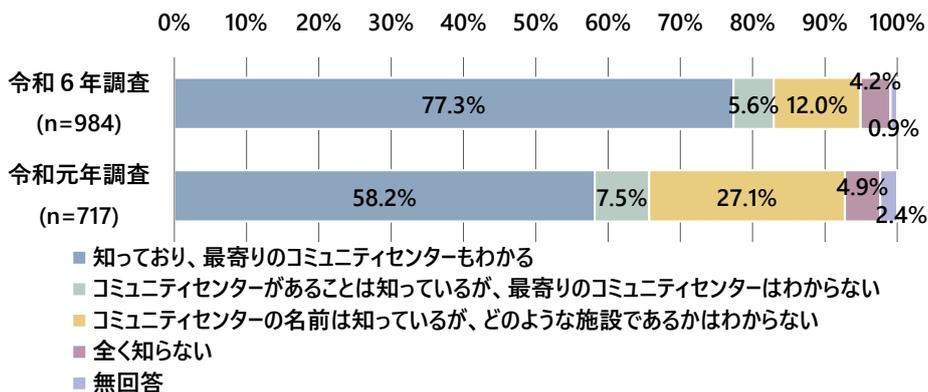
図表 26 コロナ禍前と現在での活動の変化（単一回答／令和6年調査）



● 武蔵野市のコミュニティセンターを知っているか【令和元年調査比較】

「知っており、最寄りのコミュニティセンターもわかる」が8割弱であり、令和元年から大きく増加している。また、「コミュニティセンターの名前は知っているが、どのような施設であるかわからない」の割合は1割超であり、令和元年の3割弱から大きく減少している。

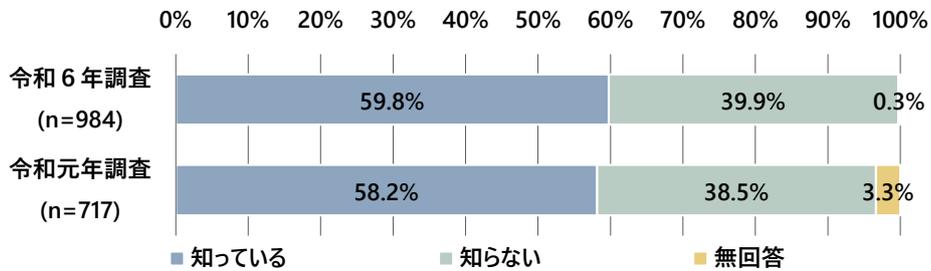
図表 27 武蔵野市のコミュニティセンターを知っているか（単一回答／令和元年調査比較）



● コミュニティセンターが地域住民によって運営されていることを知っているか【令和元年調査比較】

知っている人は約6割であり、これは令和元年からほぼ変化がない。

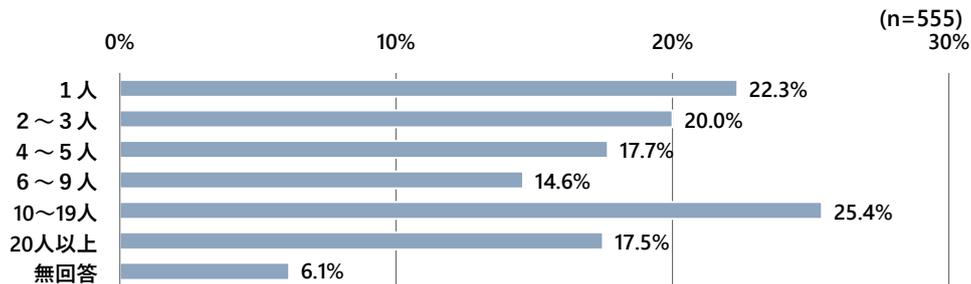
図表 28 コミュニティセンターが地域住民によって運営されていることを知っているか（単一回答／令和元年調査比較）



● コミュニティセンターを利用する際の集まりの規模

コミュニティセンターを利用したことがある場合、普段利用する際の人数で多いのは「10～19人」と「1人」である。

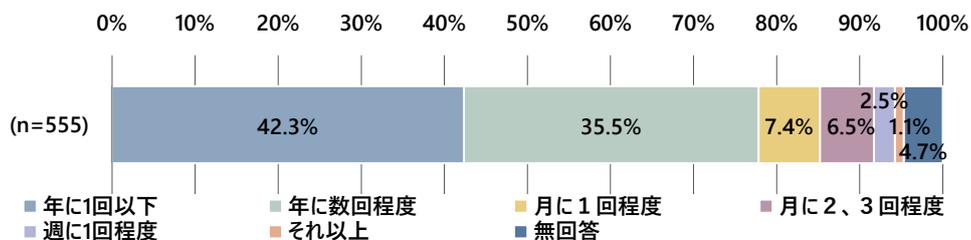
図表 29 コミュニティセンターを利用する際の集まりの規模（複数回答／令和6年調査）



● コミュニティセンターの利用頻度

コミュニティセンターを利用したことがある場合、「年に1回以下」「年に数回程度」と利用頻度が少ない割合が多く、利用者アンケートと同じ傾向を示している。

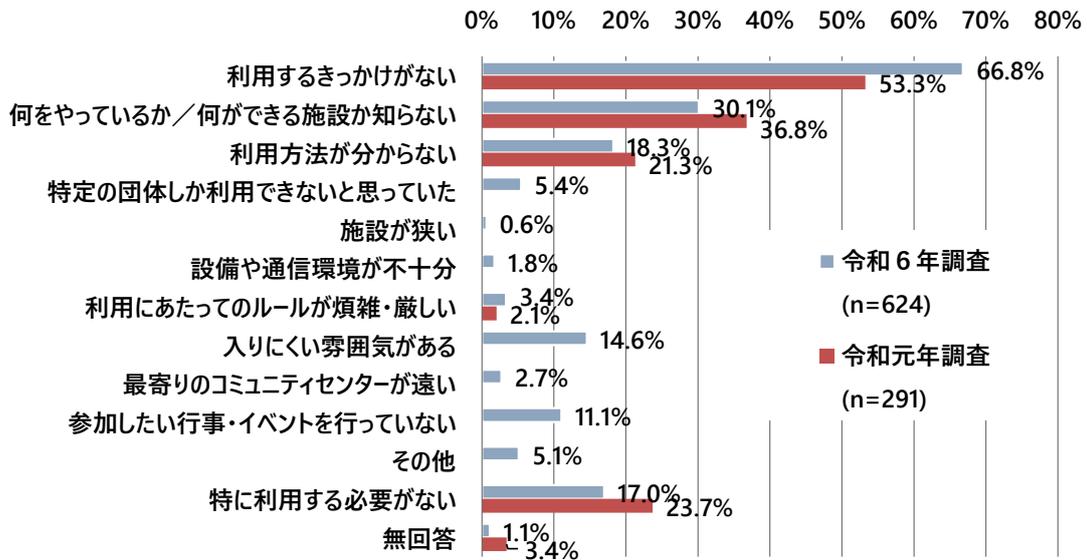
図表 30 コミュニティセンターの利用頻度（単一回答／令和6年調査）



● コミュニティセンターを利用したことがない・あまり利用していない理由【令和元年調査比較】

「利用するきっかけがない」「何をやっているか／何ができる施設か知らない」の割合が高く、特に「利用するきっかけがない」の回答割合が令和元年から大きく増加している。

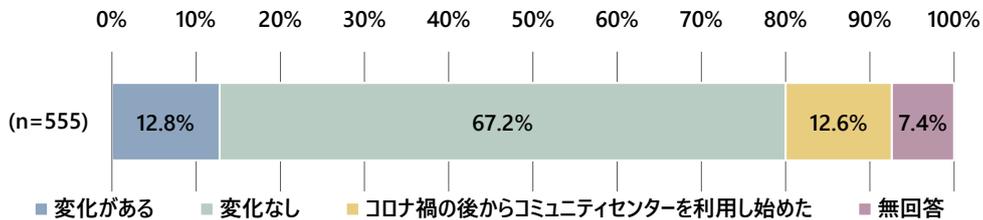
図表 31 コミュニティセンターを利用したことがない・あまり利用していない理由
(複数回答／令和元年調査比較)



● コロナ禍前と現在でのコミュニティセンターの利用に関する変化

変化があったと回答したのは1割強で、具体的な内容として利用回数・人数の減少、利用者層の変化（若い人が参加しない）、活動方法の変化（電子化等）、対策・制限の強化（マスク着用、飲食の制限、人数制限等）、利用自体しなくなった等が挙げられた。

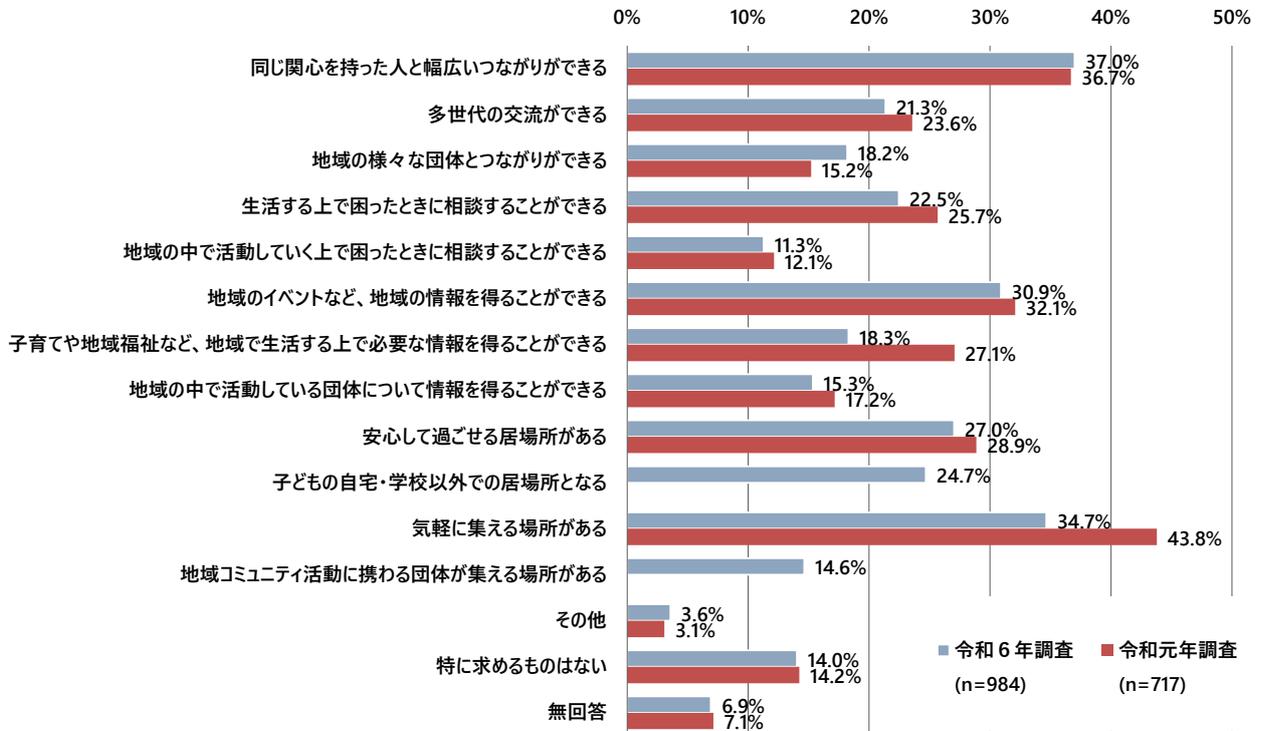
図表 32 コロナ禍前と現在でのコミュニティセンターの利用に関する変化（単一回答／令和6年調査）



● コミュニティセンターに求める機能・役割【令和元年調査比較】

「同じ関心を持った人と幅広いつながりができる」「気軽に集える場所がある」「地域のイベントなど、地域の情報を得ることができる」を求める割合が高い。令和元年もおおむね同様である。

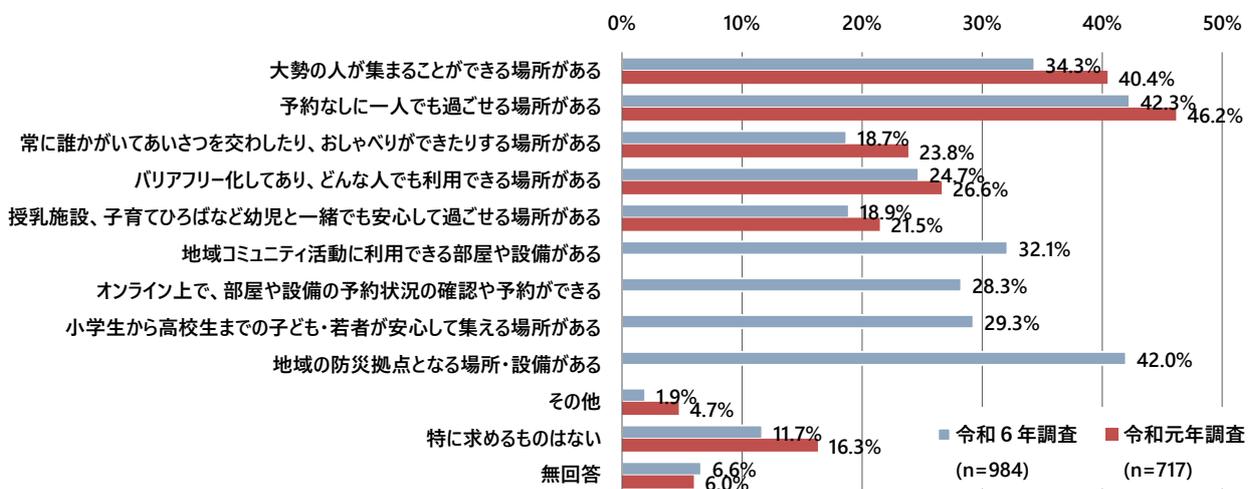
図表 33 コミュニティセンターに求める機能・役割（複数回答／令和元年調査比較）



● コミュニティセンターに求める空間や設備【令和元年調査比較】

「予約なしに一人でも過ごせる場所がある」「地域の防災拠点となる場所・設備がある」「大勢の人が集まることができる場所がある」の割合が高い。1人利用、集団利用いずれも期待されているとかがえる。

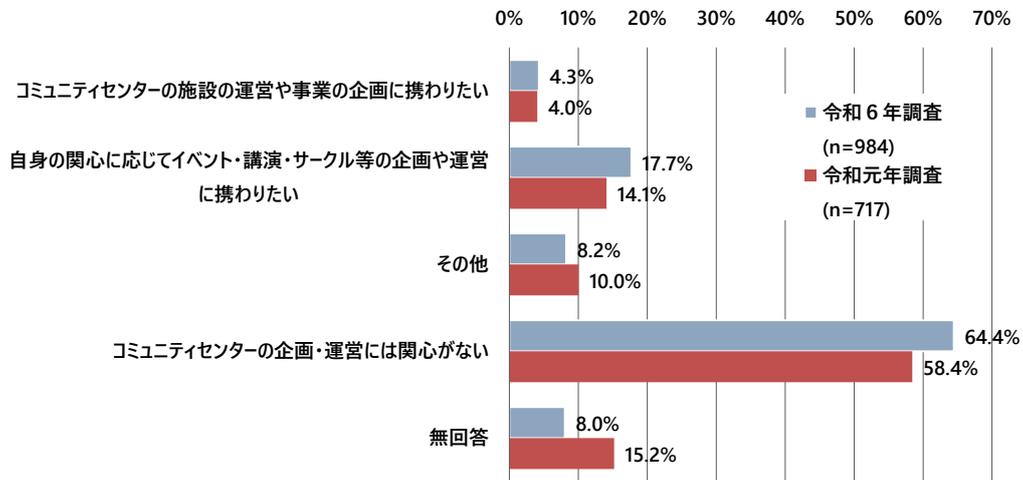
図表 34 コミュニティセンターに求める空間や設備（複数回答／令和元年調査比較）



● コミュニティセンターの運営・企画などに参加したいと思うか【令和元年調査比較】

「コミュニティセンターの企画・運営には関心がない」が6割超で最も高く、令和元年からやや増加した。

図表 35 コミュニティセンターの運営・企画などに参加したいと思うか（複数回答／令和元年調査比較）



※ 各アンケート調査の報告書は市ホームページに掲載しています。
 (市ホームページ内の検索窓に【 1048065 】と入力し検索してください。)



◀ 市ホームページ

第3章 各コミュニティ協議会の現状の取組み等

各協議会の活動を考察するにあたって、本委員会では各コミセンの現場視察をもとに、全16協議会への書面による事前調査を行った。そのうえで、評価・考察の視点（4ページ参照）のうち、①運営の工夫・利用者（住民）の満足度向上、②地域におけるネットワーク機能、③持続可能な協議会の運営を中心に、各協議会と本委員会との意見交換を実施した。

以上を踏まえ、本章においては①～③について各協議会から聞き取った現状の取組みや考えを記載したうえで、評価委員会の総括及びコメントを記載した。

また、評価・考察の視点のうち④適正な運営及び⑤施設・設備の管理については、意見交換とは別に協議会ごとにヒアリングを実施し、いずれの協議会においても工夫をしつつ適切に取り組んでいることが確認された。

1. 吉祥寺東コミュニティ協議会



吉祥寺東コミュニティセンター



サマースクールきゅうほ

① 運営の工夫・利用者(住民)の満足度の向上

- ・ 規模の小さいコミセンのため、施設管理の労力が他コミセンと比較して少なく、利用者・地域住民のニーズを踏まえた事業の充実に力を入れている。
- ・ 「九浦の家コンサート」や「アジアを知ろう」などの代表的な催しが盛況であるほか、月に1回開催する「つどい」では、ふるさと歴史館や市の吉祥寺まちづくり事務所（都市整備部）、総合政策部の職員などとも連携して様々なテーマでの講座や語り合いの場を設けており、利用者や地域住民の声を吸い上げる場として活用している。
- ・ 「つどい」は「武蔵野市これからの地域コミュニティ検討委員会」の提言を踏まえ「地域フォーラム」として開催され、単なる講座や学びの提供を越えて開催されている。
- ・ 利用者に均一の対応をすることは窓口の基本事項と考えており、「窓口業務マニュアル」及び「運営委員ハンドブック」を整備している。新しく運営委員になった人はベテランと組むなど、窓口対応を行う運営委員のペアリング等も工夫し、

問題が生じないようにしている。

- ・ 転入者への情報提供に課題を感じている。市から転入時に渡されるコミセンガイドはあまり活用されておらず、市報でもコミセンの活動や行事について十分に紙面を割いて情報発信することは難しい。今後吉祥寺東コミセンとしてチラシを作成し配布するようなことも検討している。

② 地域におけるネットワーク機能

- ・ 地域住民が楽しみ、語り合い、学び合う場を提供することを目的に企画運営をしている。特に、「つどい」では様々な方が講師として携わっているほか、毎月テーマが異なるために多様な人が参加している。一方で、関心を持ってもらえるテーマ設定には苦心しており、回によっては盛り上がらないこともある。しかし、「つどい」は月1回必ず実施され、常に新しいテーマにチャレンジし続けている。コミセンとして地域課題に能動的に働きかけテーマ設定をするようなあり方も必要であると考え試行錯誤している。
- ・ 新たな利用者層の拡大のため、コミセンにおける映画上映会を企画しており、近隣の小中学校に声掛けをしている。このような企画を通じて、これまでは利用の少なかった層（若年層など）とのつながり創出に努めている。

③ 持続可能な協議会の運営

- ・ 運営委員は40名ほどおり、うち4分の1程度は学生である。小さいころからコミセンを利用していた子が高校生・大学生となり、窓口業務に携わってくれている。窓口業務が主ではあるものの、「小中学生にももっとコミセンに親しんでほしいので自分たちも何かしたい」との申し出があるなど、自主事業にも関わってもらう良い循環ができつつある。
- ・ 学生の運営委員にとっては、自分たちのアイデアが反映されたり、自分たちの企画が実現できたりすることが、運営委員として関わるやりがいにつながっていると思われるため、今後も活躍の場を提供していきたい。また、大人として運営委員の仕事を任せられることで、本人たちの成長にもつながっていると感じる。
- ・ 窓口業務のマニュアルが完備されていることは、学生をはじめ新しい運営委員に関わってもらうために重要であると考えている。
- ・ 運営委員会では非常に活発に意見が出される一方で、長い時間かかってしまうことも多く、運営委員として関わる「やりがい」や「楽しさ」が削減されるとの指摘もあり、改善を目指している。
- ・ 若い運営委員も一定数いるものの、全体的な運営委員の高齢化は課題。そのほか、ITスキルを高め業務の効率化を図っていく必要性を感じている。

④ 総括及び今後期待すること（評価委員会よりコメント）

- ・ 近隣には子どもが少ないという課題に対し、ポスター等で子どもの利用を促した結果、実際に高校生などが利用するようになり、その後、利用していた子どもたちが学生の運営委員となって子ども向けのイベントを開催するといった好循環ができていた。高校生にとって、協議会との関わりが学校とは異なる社会とのつながりをもたらす場として機能しているようである。そのために、マニュアルや

大人のフォローの準備がなされている。大学生も含め、地元の若者がコミュニティに関心を持つ窓口になっているなどの地域密着度の高い関りをぜひ継続してほしい。

- ・ 「窓口業務マニュアル」、「運営委員ハンドブック」が備えられているのは素晴らしい、他の協議会にも紹介してほしい。
- ・ 美しい日本庭園と天井の高いホールなど個性的な魅力がある。小さいゆえの家庭的な雰囲気も醸し出しており、小規模館であることを活かして学びとネットワーク事業を継続して行っていることは特筆される。そのうえで、まず一步踏み入れてもらう敷居の低い企画があっても良いと思われる。
- ・ 「つどい」をはじめとした多様な活動の実践は、武蔵野市のコミュニティづくりの理念を体現しているものであり、つねに社会課題、地域課題、生活課題、文化・芸術など多様かつチャレンジングなテーマを扱っている点は大変に重要なものである。この熱意と経験を次の世代につなげていくための取組みを、ぜひ検討していただきたい。

2. 本宿コミュニティ協議会



本宿コミュニティセンター



初期消火&AED 講習

① 運営の工夫・利用者(住民)の満足度の向上

- ・ 赤ちゃん連れの親子、ゲームをする小中学生、勉強する高校生、大学生、社会人、おしゃべりに興じる高齢者等、幅広い年代に気軽に利用されているため、居心地の良い施設となるように配慮している。
- ・ コロナなど社会状況に対し細やかな対応（消毒液の設置など）を心がけている。
- ・ 地域の方々に幅広く利用していただくため企業には貸し出しをしない、少人数の部屋の時間貸しをOKとするなど柔軟な対応をとっている。
- ・ 課題として、団体利用の部屋予約の際、申請者以外が全員市外の時にどのように対応するかが挙げられる。

② 地域におけるネットワーク機能

- ・ 地域の方々と意見交換の場として利用者懇談会を開いている。
- ・ 防災に力を入れて取組み、9月の1か月間を防災月間として全利用者に発災時の避難行動を直接説明する時間を設けており、運営委員の訓練にもなっていると

もに、利用者と直接話し合う場にもなっている。ここ数年地域フォーラムは防災に特化した内容であり、これにより地域との相互理解を深めている。

- ・ 地域の清掃活動は、参加者が地域のことを知る、地域の人々と交流する機会ともなっている。

③ 持続可能な協議会の運営

- ・ 少数精鋭の運営委員がそれぞれの得意分野に力を発揮している。
- ・ 課題は運営委員の人数が少なく、なかなか増えないこと、高齢化が進展していることである。
- ・ 運営委員募集のポスターを張り出しているほか、地道に声掛けをしており、知人への声掛けや利用者への声掛けなどを行っている。また、住民総会の際の選任に限定せず、通年でいつでも運営委員になれるようにした。
- ・ コミセンHPのほか、X等で取組みの紹介や運営協力をお願い等の情報発信をしていきたいと考えている。
- ・ 運営委員として登録しているが普段は仕事の都合等で参画できない方に対して、その方のスキルが必要となった時に支援していただくというように、一時的にでも関わってくれる人が、関わりを続けられる規則にしたい。地域の児童の親も今はほとんど共働きなので、会議に出られないと運営委員になれないという条件は難しいと感じている。
- ・ 役員になると業務が増加し、研連や各種研修に行かねばいけないことも負担となっている。
- ・ 窓口の人のやりくりは難しいが、負担という意味では窓口より事業の運営企画に時間をとられている。企画は、運営委員がやりがいや楽しさを感じられる内容にしており、企画を立てるのは楽しい。昨年度実施した企画を列挙して次年度の担当者の希望を募ると全部希望が入ってしまい、企画が減らない状況である。
- ・ 協力員については、運営委員が協力員にコミセンだよりを届け、配布後、状況報告をコミセンにしに来てもらって繋がりを保っている。ただし、協力員も高齢化し、まつりの設営が難しくなっている。コロナ禍を経て、コミセンまつりの運営が協力員頼みという意見もある。

④ 総括及び今後期待すること（評価委員会よりコメント）

- ・ 防災月間は、防災について防災意識を高めるだけでなく、利用者と個々にコミュニケーションをとりながら、運営体制における対策の限界を知ってもらうという工夫した取組みである。
- ・ 他の協議会の取組みなども参考にしながら、PTA世代の状況の変化に応じた関わり方の工夫がさらにされていくと良い。小学校PTA、青少協との人的つながりがあり幅広い年代が参加しているうちに、人員増・体制強化への積極的な取組みやイベントのあり方の再検討が期待される。
- ・ 日常的な市民交流の場の充実を図るためにも、利用者懇談会へ常連の利用者以外の方も参加しやすいようなさらなる工夫があると良い。
- ・ 持続的な活動継続のため、運営委員の負担軽減のための作業内容の効率化や簡素化を行いながら、防災などの重要性が高まっている点には新しい取組みを行うな

ど、メリハリが利いた活動の見直しを不断に行っている。このような取組みには葛藤があることも推察されるが、効率的に活動したいというニーズは新規参加者に特に大きいことが予見されるため、重要な取組みであると考えている。

3. 吉祥寺南町コミュニティ協議会



吉祥寺南町コミュニティセンター



南町フリーマーケット

① 運営の工夫・利用者(住民)の満足度の向上

- ・ 本施設は、音楽・ダンス・演劇など市民の文化的欲求にも応えられる大型館であるため人気がある。
- ・ ピアノ設置のホールとスタジオ2つという、音楽活動が可能な部屋の多い市内でも数少ない施設なので、市内各地域から予約者があり、抽選で対応している状況である。
- ・ スタジオの利用者が多く、できるだけ公平で利用しやすくなるように、隙間時間を使えるような利用ルール、当日利用の柔軟なルールなどの工夫をしている。
- ・ それ以外にも、状況の変化に合わせて、開館・閉館時間や貸し出し条件など、利用のルールを柔軟に運用している。
- ・ 吉祥寺南町コミュニティ協議会や福祉の会などの活動から生まれた「南町居場所プロジェクト」によるコミセンを利用した「コミュニティ食堂」が開催されている。
- ・ 囲碁・麻雀などグループサイズの小さい利用団体の増加に対応するため、会議室の分割も視野に入れて検討している。
- ・ 囲碁・麻雀・ゲームなどの利用は、一般利用者の利用の妨げにならないような工夫が必要である一方、これらの方々も楽しめるようなルールづくりにも配慮が必要と考えている。
- ・ 冷暖房設備の老朽化により適温調整が難しいことが課題である。
- ・ 運営の在り方は運営委員会、窓口会議などで丹念に議論されており、特に新しい取組みや取組みの変更に関してはしっかり議論されていると考えている。

② 地域におけるネットワーク機能

- ・ 約150人の協力員がおり、その協力により南町地域の約6,200戸にコミュニティニュースを毎月配布しており、開館以来41年間で521号の発行配布を継続して

いる。

- ・ 大変だが地域の情報が欲しい人には結構見てもらえており、他の団体の情報も掲載しているなど、地域の活動につながっている。また、配布が地域の点検活動にもなっている。
- ・ ただし、近年は配布担当の高齢化により配布範囲の変更や調整などが課題となっており、全戸配布をいつまで続けられるか危惧している。
- ・ 地域の状況を理解している、地域の方々が利用できる施設という立場は維持できている。
- ・ 一方で、地域の人たちをコミュニティ活動に巻き込むことや一緒に何か活動を生み出すということは十分にできていないと感じている。
- ・ 運営委員会は議論の場にとどまり、地域と一体となった活動の主体となれていないと考えている。

③ 持続可能な協議会の運営

- ・ 運営委員39名、協力員157人という体制はあまり変動なく維持できているが、イベント実施時の主力となる年代層が薄く、新たな参加者を引き込む事業型の活動が弱くなっている。
- ・ 多くはないが、利用者から運営に関わる立場となった運営委員もいる。
- ・ コミセン利用の子どものママ友に窓口当番の勧誘を行ったりもしている。
- ・ 運営委員と窓口担当が役割分担しており、窓口が貸館業の中核となり、運営委員会が①窓口の運用方針を確認・チェック、②コミュニティに対する（巻き込むイベント）の決定・実施を担うことが基本となっている。
- ・ 運営委員会から新たな提案が生まれてこない。例えば文化祭でも場所貸し的な要素が強くなっている。企画力のある人材が少ない点が課題である。
- ・ 運営側に若い人が少ないと若者向けの企画が少なくなり、若者のコミセン離れが進むため、若い世代の参加が重要であると考えている。
- ・ 南町居場所プロジェクトを立ち上げて、コミセンの協力のもと、居場所として地域の皆さんが参加するイベント・活動を企画、運営している。このような活動主体をコミセン組織内に持つことが良いと考えているが、難しい状況である。

④ 総括及び今後期待すること（評価委員会よりコメント）

- ・ 協議会が主催する文化祭のほか、フリーマーケットなど他の団体が主催となり、協議会が共催する事業なども行っている。場所を持っていることと地域コミュニティのハブとしての存在意義を発揮できている例であると思われる。
- ・ 南町居場所プロジェクトについては特筆すべき取り組みだと思われる。どのようなことを志向するか、他の協議会とも協力しながら検討しても良いと考える。
- ・ コミセンニュースの構成が大変工夫されており、地域の今のニュースだけでなく、コミセンの理解が深まる作りとなっている。そのうえで、こういった視点のフォーマットを共有する、また配布方法の更新の必要性を検討するのも良いと考える。
- ・ 大規模館であることから、運営委員、利用者ともに南町コミセンがいかなる場所であるのかの理解が多様化しており、その理解の違いがうみだす困難をどう乗り越えるべきかについて、協議会の枠にとらわれずに真摯に取り組んできたことが

理解できる。今後は、南町居場所プロジェクトのような既存の枠にとらわれない活動をより一層活発化させるとともに、コミセンの存在の意義をより広く共有し理解を広げる仕掛けをさらに検討していただきたい。

4. 御殿山コミュニティ協議会



御殿山コミュニティセンター



防災訓練

① 運営の工夫・利用者(住民)の満足度の向上

- ・ この地域で生まれ育った運営委員の方々も多く、歴史あるこの地域を見守り愛着を持って活動に参加している。
- ・ 利用促進に向けて、事業案内のポスターや看板等で、早期からの声掛けとアナウンスをしている。
- ・ 入館しやすい演出と、館内の明るい雰囲気作りを心掛けている(四季の折り紙や手作り作品の展示など)。
- ・ 利用者の意向を反映するために、独自の利用者アンケートを実施し管理、運営に役立てている。
- ・ サークルとして利用申請があっても、実際には有償教室であるということがあり、管理運営上の課題となっている。
- ・ 駅に近いことから市外の住民の利用も多く、武蔵野市のコミセンへの理解が十分ではない方の利用に対しても対応を行っている。
- ・ 建築基準法による制約があり、構造上利用者には屋根があると思われる入口部分に屋根が設置できないことが、利用者にとって不便となっている。

② 地域におけるネットワーク機能

- ・ エリア内の全世帯へのコミセンだよりの配布に努めている。
- ・ コミセンはあって当たり前だと思われており、運営は誰かにお願いしたいと考えているのではないかと感じている。

③ 持続可能な協議会の運営

- ・ 運営にあたって一番課題になっているのは、やはりマンパワーである。市外の方

の利用が多く、積極的に利用者を運営に巻き込むことが困難な中、一部の人に負担がかかっており、窓口や会議など、関わるにつれて責任も時間的拘束も増える状況にあり、ボランティアの域を超えていると考えられる。

- ・ 一方で、少ない人数なので、関係が密になるので連絡はつきやすいという利点もある。
- ・ 昔から協力している方もいるが高齢化しており、新しい方の担い手が不足している。このため、事業の見直しや、若い人に窓口に入ってもらうための取組みを進めている段階である。
- ・ 高齢者ばかりだと、若い方は入りにくくなりそうなので、窓口はなるべく若い人で揃えたいと考えている。
- ・ はじめての試みとして有償ボランティアのチラシをエリア内の個人宅にポスティングしたところ反響があった。
- ・ チラシやポスターの作成、買い出し等、事業の企画が特に大変であり、ある程度お膳立てをして指示を出すなど、事業の企画においても役員の負担が大きい。
- ・ 窓口担当の確保が困難な状況にあるが、役員が窓口担当を担うのは、結果的に運営全体を見ることになるという利点もある。また、主に窓口担当として窓口に入っている時間に企画を考えている。一方で、協力員は興味のあるところだけに参加するので、こうしたことを強制はできない。
- ・ 新しい事業として趣味の会、スマホを楽しむ会などを継続的に行うことによって、地域の人々に御殿山コミセンを知ってもらうきっかけになり、運営委員もやりがいを感じる事ができた。
- ・ コミセンに関する情報発信はポスター掲示やホームページで行っている。

④ 総括及び今後期待すること（評価委員会よりコメント）

- ・ 地区外の利用者が多いことから、運営への参加者をリクルートすることが難しくなっている中でも、少人数の中心的なメンバーで、使いやすい館の運営が工夫されている。
- ・ ボランティアとして、各自の興味関心に合わせた手伝いはしてもらえるものの、そういった人たちをコーディネートしていくことが、大変になってきている。そうした中で、チラシを配布したり、人数確保に苦勞している窓口担当を若い世代を中心とするなど、地域の方々が関わるきっかけづくりを工夫している。
- ・ 四季の折り紙作品やおしゃれな内装による入館しやすい雰囲気演出は、大変良い取組みと思われる。市民の作品を飾ったり、講座を開催したりするなど、今後の発展に期待したい。
- ・ 運営陣のお揃いのエプロンは分かりやすく、声をかけやすくコミセンのアピールになっている。
- ・ 駅近であることによる活動の難しさをしっかりと理解しながら、コミュニティづくりのためにできることを着実にやっている。また運営委員やボランティアのリクルーティングにおいても様々な工夫を行っている。

5. 本町コミュニティセンター協議会



本町コミュニティセンター



センター祭と元気市

① 運営の工夫・利用者(住民)の満足度の向上

- ・ コミセン事業に対して運営委員皆で協力して活動している。
- ・ 吉祥寺駅から近いという立地の良さがあり、利用者は多いが、市外利用者が多い。
- ・ 1階のサロンは地域の高校生も含めた若い方の利用が多く、机の並べ方を工夫して一人でも多くの方が利用できるようになればと考えている。
- ・ 一方、駅からとても近いという立地により、市外の方の利用者が多く、利用者が運営の担い手になりにくい現状がある。
- ・ 障害を持っている人が利用するケースも増えているが、専門知識が無いので対応が難しい局面もある。以前に比べてこうしたケースが増加しており、しっかりと対応することも必要と考えられるため、例えば市で学習会を高い頻度で実施してもらえるとよいと考えている。

② 地域におけるネットワーク機能

- ・ 環境浄化運動の中でできたコミセンであり、現在も地域の団体と連携し環境浄化に取り組んでいる。
- ・ 地域の方々に一人でも多くコミセンに足を運んでもらえるよう、運営委員会で新しい事業の企画等の話し合いを続けているが、運営委員の人数の関係もありネットワークづくりまでは十分に行えていない。
- ・ 声掛けは重要で、利用者や地域の人たちを笑顔で迎えることが重要だと思っている。以前より窓口担当者が明るい声で対応するようになっている。一人暮らしの高齢者で、ここでの声掛けが人と話す貴重な機会になっている人もいるようだ。
- ・ 地域の清掃活動に取り組んでおり、この活動が、参加者が地域のことを知る、地域の人々と交流する機会ともなっている。

③ 持続可能な協議会の運営

- ・ 運営委員の高齢化が進み、一番若い運営委員でも50代後半である。また、運営委員が少ないという課題があり、将来にわたり続けていけるのか不安がある。特殊な立地であり、周辺にマンションも多いが、マンション住民の参加者や利用者は

少ない。基本的には知人を中心に地道に声掛けを進めている。

- ・ 4年後の移転を見据えて、移転後はもっと若い人が中心になって運営してほしいと思っている。今のコミセンのルールは若い人にとって窮屈と感じる面もあるのではないかと考えており、世代交代に伴ってルールを見直した方がよいと考えている。

④ 総括及び今後期待すること（評価委員会よりコメント）

- ・ 吉祥寺駅に近い便利な立地で、多くの多様な人々が利用する中で、真摯に利用者目線の運営を工夫している。
- ・ 窓口担当者が明るい声で応対していることは素晴らしい。特に一人暮らしの高齢者への声掛けは大切なことと思われるので、来訪を歓迎していることを広く周知できるとよりよいと考える。
- ・ 利用者にとっては吉祥寺駅近くの抜群の立地もあり、多様な利用者が訪れる点では他のコミセンと違う苦勞も多い。また、商業地でマンション住民の多い地域性を考慮しつつ、他団体と連携し清掃活動などの地域活動を地道に続けつつ交流しているのは良い実践であると思われる。
- ・ 建て替え・移転に向けて、次の世代のコミセンとはどうあるのかを、ぜひ模索していただきたい。

6. 吉祥寺西コミュニティ協議会



吉祥寺西コミュニティセンター



吉西コミセンまつり ポッチャ体験

① 運営の工夫・利用者(住民)の満足度の向上

- ・ 委員は運営に長く関わっている人が多く、行き届いたサービスを実施することで、安全で安心な利用の場を提供している。また、伝統的に庭の手入れを良くし、子ども向けの事業の場として有効に利用している。
- ・ コロナで利用者が減ったため、人数・回数・時間等の利用条件を定期的に見直しているほか、分館のスマートロック導入に併せて開館時間を変更するなど利便性の維持向上に努力している。
- ・ 新規事業にも随時取り組んでいる。新規事業を立ち上げるためには労力が必要となるため、自然には発生しない。新しい事業を立ち上げる仕掛けの一つとして、投書箱を設置し、何をやったらいいかという意見を求めた。スマホ教室やポッチ

ャ倶楽部などはこの結果うまれたものである。

② 地域におけるネットワーク機能

- ・ 新しい活動を始めなければ活動は次第に減っていくという問題意識を踏まえ、新規事業の立ち上げ（生き生き体操、ボッチャ倶楽部、スマホ教室、ヤングママ料理教室）を積極的にしている。また、NPO、大学ボランティア、PTA、商店会等と幅広く連携（共催、協力、ネットワーク）して、みかづき子ども食堂、コミセンまつり、西公園なかよし祭り、料理教室などの各種事業を実施している。こうした事業を通じて地域住民交流の拠点を成している。中でも「みかづき子ども食堂」は、子どもやその親との交流の機会として意義も大きかった。また大学との連携も実施している。
- ・ 地域の各団体が参加する「地域懇談会」を、協議会がコーディネーターとなって開催してテーマを決めて意見交換を実施することで、地域の団体との連携を確保している（令和6年度は防災）。地域のお祭りの開催に向けて、年2回は議論して進めている。
- ・ 地域活動をしていると、そこで活動している人がおよそ見えてくることで、人材の発掘につながる。それぞれ今も忙しくしているが、頼めば活動に参加してもらえることもあり、こういう方に将来運営委員になってもらいたいと感じている。また、学校との連携の中でPTAと連携すると、将来子どもが学校を卒業した後に次世代の運営委員の有力候補になると期待している。さらに小学校ではコミセンの見学会を実施しているので、そこで知った小学生が利用者になるとよい。
- ・ スマホ教室を立ち上げたのは30代の運営委員だったが、自分で事業を起こせるような能力のある方であったことから、運営委員以外の場所での活躍を期待して運営委員からは外れ、今は外部協力者として活躍してもらっている。

③ 持続可能な協議会の運営

- ・ 高齢者が多く、土日夜間の窓口対応可能な委員が不足するなど、委員構成の偏りがある点が課題である。
- ・ 昨年から窓口担当を募集するポスターを施設周辺に9か所掲示したが、有償であると明記することで、令和5年度に男女5名ずつ10名の応募につながった。最終的には5名が残っている。募集に際しては、運営委員会には出られないが窓口は担当したいという希望も柔軟に受け入れており、こうしたことも人材確保においては有効であった。
- ・ 業務の電子化への対応の遅れにより、協議会内及び対外業務の効率化と利便性に立ち遅れが発生している。コミセンの運営上の大きな課題は専門の事務職がおらず事務負担への対応が困難であることである。

④ 総括及び今後期待すること（評価委員会よりコメント）

- ・ 人員確保を従来の人づてに頼らず、募集ポスターを人通りの多い場所に掲示するなどの取組みが機能しており、応募者にも柔軟な対応がなされるなど努力がなされ成果を上げている。

- ・ 子ども食堂を行う団体との連携により、コミセンで子ども食堂が開催されることで、50人以上の子どもやその親たちが集まっていることは、新しい住民を中心に地域の方にコミセンの存在を知ってもらう良いきっかけになっている。そして地域とのつながりを絶やさないために、他団体とのテーマごとの懇談会の開催や、幅広い年代層に対応した細やかな事業展開をしている。
- ・ 新規事業に投書箱を活用したことは成果が上がっており、効果的なことだと考える。市民自らが事業を運営することを協議会がサポートするような形も期待したい。
- ・ 分館の管理形態を技術的に簡素化した点はよい取組みであり、今後他館への発展可能性を持つものである。

7. 吉祥寺北コミュニティ協議会



吉祥寺北コミュニティセンター



北町さわやかまつり

① 運営の工夫・利用者(住民)の満足度の向上

- ・ エアコン付の体育館や明るく広い1階のロビー、図書館コーナー等多様性のある会議室、寄贈品の珍しいグランドピアノ（ベヒシュタイン製）の利用者開放等、設備（備品）が充実しているだけでなく、幹線道路から離れた住宅地に立地しており、周辺には商業施設等がないことから利便性の高い大型施設として利用されている。このため、赤ちゃん連れが利用できるよう授乳室があると良いとも考えている。
- ・ 一定の館内ルールは確保しつつ、当日空室の場合は、柔軟的な利用ができるよう住民目線での管理・運営を心掛けた結果、コミセン利用者が大幅に増加した。
- ・ 利用者へは、挨拶と笑顔で接する事を心掛けており、窓口の担当者ごとに対応が異ならないよう留意している。
- ・ 従前より課題であったコミセンの予約のオンライン化を個別に検討している。

② 地域におけるネットワーク機能

- ・ 特定の団体のみならず、親子連れが当日利用で気軽に立ち寄ってもらえるような雰囲気づくりに努めている他、将来の担い手づくりの一環として、日常的に親子連れの子ども達に「長風船」をプレゼントする取組みも行っている。
- ・ 多様性のある年代層に参加してもらえるようなイベントの企画・開催を目指して

おり、『ふれあいひろば』（子ども・大人食堂）を毎月開催するなど、福祉的な事業も充実させている。

- ・ 地域の方々にコミセンやその活動内容について周知することが重要だと考えており、LINEオープンチャットの開設（2023年11月）（8/20現在会員数78名）やホームページへの「北コミュニティだより」のアップなどSNSによる広報活動に力を入れている。現在、NPO法人サービスグラントのデジボノチームとの連携により、無コストによるホームページのリニューアルに取り組んでいる。
- ・ 地域づくりは運営委員のみでつくるものではなく、地域住民と協議会が一体となって取り組んでいくものと捉えており、今後もこれを目標に努力を重ねたいと考えている。

③ 持続可能な協議会の運営

- ・ 運営委員（兼窓口当番）のうち6名が現役大学生（もともと地域住民かつ利用者であった方や地元の大学の学生）であり、パソコンの活用促進や新しい感性・発想の掲示物作成等、好ましいインパクトが発生している。また、窓口に大学生が立つことで利用者から興味関心を持ってもらうきっかけにもなっている。
- ・ 勤労者や学生の運営委員が増加したことにより、各会議体の開催時間を夕方からに変更したり、窓口当番を2時間×2組制で4時間確保するシステムやシフトのエントリー制を導入したりといった転換を図った。
- ・ 管理運営においては、自主三原則の思想を基本に、決して強制・強要することなく緩いコミュニケーションの醸成に取り組んでいる。
- ・ 営利目的によるコミセン利用については他コミセンにとっても難しい問題であるが、利用の可否を営利、非営利ではなく、公益的（地域に貢献する活動）かどうかで判断すべきではないかと考えている。「コミセンは地域の活動を阻害してはならない」という考えに賛同しており、やみくもに営利を制限することにはこだわらべきでないとも考える。
- ・ ムーバスへの広告掲載を考えるなど、広報の努力をしている。

④ 総括及び今後期待すること（評価委員会よりコメント）

- ・ 新たな視点で活動を見直すことで、「コミセンの活性化」が図られている。大学生が運営に関わっていることや勤労者の運営委員が増加しており、効果をあげている。
- ・ 協議会は地域住民によって構成されており、運営委員は住民からの有志によるボランティアであるということを再確認し、多くの人の賛同を得ながら変革をしていくことが期待される。
- ・ 学生の参加はとても頼もしい。より学生が活躍できるよう、運営委員の役割と責任を規約に照らして再整理し、理解してもらうことが望まれる。
- ・ 活動の見直しを図り、積極的に新しい取組みに挑戦しようとしている。一方、無償で利用できるコミセンにおいて有償に資する活動を行うことについては、慎重な検討が必要であると思われる。

8. けやきコミュニティ協議会



けやきコミュニティセンター



夏まつり

① 運営の工夫・利用者(住民)の満足度の向上

- ・ 利用者には元気に挨拶する等、コミュニケーションを大切にしており、誰でも自由、気軽に利用できるよう柔軟な対応を心掛けている。
- ・ 入館時の記名不要、麦茶サービス（冷・温）や窓口でのコーヒー提供など、心地よく滞在しやすい場の提供を心掛けている。
- ・ おまつり等イベントの際に利用することもあるため、隣接する公園の花の手入れやゴミ・落ち葉の清掃、落とし物や子どものけが対応等も行っているが、市の公園担当課との調整が円滑に進まないことがある点が課題と考えている。

② 地域におけるネットワーク機能

- ・ 毎年続けている3大イベント（けやきまつり、夏まつり、どんど焼き）を通じて地域の人と人が繋がる機会を設けている。
- ・ 夏まつりで1つの部屋を成蹊大学生に貸して、準備に係る費用だけ負担し、「好きなことをやってよい」と任せたとこ、お化け屋敷の企画・運営を行い、好評を得た事例がある。地域の人に「けやき（コミセン）に持ち掛けると、前向きに考えてくれる」という認識を広げていきたい。
- ・ 地域団体に関わる運営委員も多く、それぞれの地域団体の課題を持ち込んだり、反対に地域団体に対してコミセンの情報を提供したりしてくれており、地域団体で総会やイベントを行うときは部屋を優先的に貸し出すなどの協力をしている。

③ 持続可能な協議会の運営

- ・ 窓口人員が30数名いるが、トイレトペーパー係、コーヒーカップを定期的に漂白する係など役割を細分化して希望制で割り振ることで、各自の負担感を減らすとともに役割意識を得られるよう工夫している。一方で、負担感の少ない役割に希望が集中する傾向があり、会計や企画などのコアの部分は中間年齢層が担わざるを得ない点が課題である。
- ・ イベント等を企画・運営する際は全員参加を心掛け、小さなことも皆で話し合い納得することを大切にしている。

- ・ シニア世代の運営委員は窓口などで人とのつながりが生まれ、運営委員同士でも交流がありとても生き生きと活動する場となっている一方で、企画がシニア世代向けに偏ってしまっている部分もある。
- ・ 新しいことを企画しようとする人が少なくなっており、若い人に継続的に参加してもらえるよう運営の楽しさを伝えていく必要がある。
- ・ 運営委員の高齢化が進んでおり、利用者や関わりを持った多くの人に声掛けをして協力を依頼しているため、おまつり等イベントの手伝いは充足しているものの、運営として参加してくれる人がなかなか見つからず、メンバーが地域団体とかぶっており、将来的に高齢化で負担増が予想される点が悩ましい。

④ 総括及び今後期待すること（評価委員会よりコメント）

- ・ 小さな係を意図的に作り、皆が関りを持てるように工夫している。しかし、力仕事や責任の重い仕事には、結局関わる人が少なくなってしまうようであり、若い世代の人たちにとっても居心地の良い、関わりがいのある協議会の運営について、今後もぜひ検討を続けていただきたい。
- ・ 利用者に元気よく挨拶するなど、大学生から高齢者や子育て世代まで幅広い年代層が利用し快適に過ごせるよう工夫されているので、現状の取組みを継続してほしい。
- ・ 夏まつりで、大学生に「準備費用だけ負担して、好きなことをやらせてもらう」試みが好評であることや、地域団体からの持ち込み企画活用へのアプローチなど、「けやきらしさ」を前面に出して、活動事例を作っていくほしい。
- ・ 運営委員の高齢化を見据え、いまずぐに積極的に活動はできなくとも将来的に活動が期待される人に運営委員に加わってもらい、応援してくれる人をつなぎとめていくという取組みは、他の協議会にも参考になる取組みである。
- ・ 「けやきらしさ」という価値観を、多くの人に共有できるよう様々な取組みや、地域、行政との対話のあり方を通して構築し維持している。この価値観の共有とそのアップデートこそがコミュニティづくりの中核となる。

9. 中央コミュニティ協議会



中央コミュニティセンター



流しそうめんとかき氷

① 運営の工夫・利用者(住民)の満足度の向上

- ・ 1階ロビーは誰もが気軽に立ち寄ることができるオープンスペースとして、囲碁をはじめ、少人数でのおしゃべりや休憩、小中学生のグループ学習など幅広い年齢層の方々に利用されている。中町集会所も同様に、1階の集会室が空いているときは休憩に使ってもらう等、柔軟に対応している。
- ・ 交通の便がよく、市内他地域や他市からの利用者も多いことから、地域住民（申請者）の優先予約を行っている。
- ・ 1館分の備品費で中央コミセン・中町集会所の2館分を賄う必要があるため、備品が不十分であることや、両館とも防音・遮音の部屋がないので利用に制限を設けざるを得ないことを悩ましく思っている。

② 地域におけるネットワーク機能

- ・ 利用頻度の高い1階多目的室について、部屋利用が早く終了したり予約がなかったりする時は卓球利用希望の小中学生に当日利用として開放し、子どもたちの居場所づくりに役立っている。
- ・ 将来的に地域を支えていく子どもたちに向けて「地域の人たちが集い、協力して地域コミュニティづくりに貢献している」ことを学ぶことができる場となっていくよう努めている。
- ・ 若い世代（子育て世代）の団体には声掛けしてイベントを開催してもらうこともあり、先日の夏祭りのイベントでは1,000人以上の集客があった。
- ・ 地域社協をはじめとした地域団体、利用団体にも自主事業に参加してもらっている他、中央コミセンの向かい側にある第一中学校のPTAや生徒等にも参加してもらっている。また、第一中学校の卒業生が、高校の授業の一環でボランティアとして自主事業の手伝いに参加してくれたこともあった。
- ・ 一方で、意見交換を目的として昨年より地域の団体に声掛けしているものの、集まる団体は多くなく、思うように実施できていない。

③ 持続可能な協議会の運営

- ・ 運営委員や協力員の拡充には、コミセン広報紙での募集とともに利用者に積極的に声掛けをしている。例えば、子ども向けの自主事業には極力親子で来てもらい、申込みの際に協力員の勧誘を行う等の取組みも実施している。
- ・ 協力員は60名程度であるが、ほとんどの協力員が年間で1～2回は必ず行事に参加してくれている状況である。イベントへの協力を経て、やりがいや楽しさを実感してもらえているようである。
- ・ 一方で、新しく運営委員になっても負担が大きく定着しづらいことや、提出書類の作成をはじめ、業務量の増加によりボランティアの域を超えているように感じる人が増えていることが課題である。事務作業が苦手、デジタル化についていけない等の理由で役員を引き受けてもらえないケースも少なくない。
- ・ 世代にかかわらず始めた時期によってボランティアに対する感覚が異なっており、そのギャップをどう調整、すりあわせるかが課題となっている。
- ・ イベントへの協力も時間拘束が長いと人が集まりにくいいため、「2時間だけお願いします」など声掛けを工夫している。

④ 総括及び今後期待すること（評価委員会よりコメント）

- ・ 地域の団体と連携が取れており、子育て世代にもイベントなどへの参加を通して、つながりができている。年間のメイン行事への参加者数を見ても地域住民の高い認知度がわかり、そこに至る様々な声掛けや努力が感じられる。意見交換会への参加には、呼びかけの際、具体的なテーマを設定するなど、参加のしやすさを工夫することも考えられる。
- ・ 大きな事業の運営や事務作業において、担当者の負担が増えている状況があるが、時間や役割を切り分けて、負担が少なく関わってもらえるよう工夫している。
- ・ 大型施設の中央コミュニティセンターと小規模の中町集会所の2施設を運営する労力確保に苦勞している。2施設の運営に必要な備品経費等については、今後取扱いの検討の余地がある。
- ・ 中町集会所のあり方については、その存廃や管理方法を含めて今後慎重に検討していく必要があると思われる。またそれまでの間は、中町集会所と2館体制であることを考慮した行政からの支援体制も重要となる。

10. 西久保コミュニティ協議会



西久保コミュニティセンター



西久保ふれあいまつり

① 運営の工夫・利用者(住民)の満足度の向上

- ・ 利用スペースの種類（フロア、和室、料理室、会議室、庭）と部屋数が多いことから、体育系、文科系、芸能系、料理食事系等、幅広い活動に使用可能なため、多くの方にご利用いただいている。
- ・ 駅から近く市外の利用者も多いことから、予約は一定期間を地域住民優先としている。また電話による仮予約受付や、予約可能日を調整することで利用者への便宜を図っている。また、以前は開館時間になるまで館内への入館は不可としていたが、現在は窓口の人員がいれば開館前に入館可能に変更した。
- ・ ハード面の課題として、ロビーの冷暖房設置や照明のLED化、ハード・ソフト両面の課題としては閑静な住宅地内に位置しているため周辺住民との協調に配慮する必要（草刈りの騒音など）があることが挙げられる。

② 地域におけるネットワーク機能

- ・ 西久保コミセンの周辺には他に公共施設がないため、地域コミュニティの拠点と

なる要素が強いと認識している。

- ・ 地域の他団体と積極的に協力し提携をはかっている。例えば中学生主体の「ナイトハイク」、小学生を執行委員に加えた「ふれあいまつり」等においては小中学校、青少協、PTA、福祉の会等と協力し実施している。また、十数名の委員が地域内唯一の町会組織である西久保一丁目町会と兼任しており、重要な事業は共催している。
- ・ 町会以外にも福祉の会等の地域団体と兼任しているケースも少なくなく、地域団体で顔見知りになり、コミセン運営に勧誘することもある。
- ・ 協議会が地域内で、ある意味で住民を代表する団体と見られていることが正当なのかという疑問を抱いている。

③ 持続可能な協議会の運営

- ・ 個々の事業には希望制で参加してもらっており、多くのメンバーは楽しく実行しているように見受けられる。
- ・ 新しい人員については、年に1～2人程度の応募があり、運営委員の募集を見たり、協力員の近所に住んでいて話を聞いたりしたことが応募のきっかけになったと聞いている。コロナ禍も明けたため、これからまた少しずつ関わってもらえたらという思いがある。
- ・ 一方で、一般の管理運営についてはメンバーの長所を活かせるよう配慮して配置しているが適材適所の配置が十分に実現できていない面もある。また、運営委員の中には会社員経験がなく、市への提出文書の作成や見積取得等パソコンを使った事務作業が不得手な人もおり、一部の委員に負担が偏っている点が課題と感じている。
- ・ 運営委員の高齢化に伴い力仕事、高所での作業に人手が不足しており、若い人が入ってきてくれることを望んでいるが、手当の額などの面で厳しい状況である。
- ・ また、当初はボランティアとして地域に貢献したいという思いで参加したが、任される業務が増えており、ボランティア精神だけで行うことが難しくなっているように感じる。

④ 総括及び今後期待すること（評価委員会よりコメント）

- ・ 地域の各団体と連携・共催して子どもたちや住民に向けた各種事業を展開できていることは、協議会の継続的実績に対する評価である。地域の他の団体との連携が取れており、地域で頼りにされている様子がうかがえる。
- ・ 地域の方を優先しながら、利便性を向上させる工夫がなされており、電話での仮予約と本予約への切り替えやその調整など、努力がなされている。
- ・ 人員の確保については、まずは協力員として関わってもらえるよう、具体的な活動内容を記して、コミセンの掲示板等で募集することも考えられる。
- ・ 青少協との共催でナイトハイクを現在も継続するなど、新しい活動と過去からの活動の双方を重視している。
- ・ 近隣に避難所となる学校がないことから、災害時に地域支え合いステーションとなることで果たしうる役割について真摯に検討している。

11. 緑町コミュニティ協議会



緑町コミュニティセンター



子どもまつり

① 運営の工夫・利用者(住民)の満足度の向上

- ・ 小さいコミセンだが、大人数が入れるホールがあり、コンサートや交流会など多様な活動ができている。
- ・ 令和6年度は7月から給排水設備等更新工事で休館するため、5・6月には積極的にイベント等を開催した。特に、例年8月に開催される「子どもまつり」を5月のゴールデンウィークに開催し、大盛況であった。施設は狭いが、近隣のテニスコートも借りて体を動かす企画なども実現できている。
- ・ 大規模改修による休館により、協議会の活動が行われないと再開時にメンバーが戻ってくるか不安がある。
- ・ 以前は9:30~21:30の開館時間だったが、21:00過ぎはほとんど利用者が無く、市と協議し、実態に合わせて9:00~21:00に開館時間を変更した。また、ニーズを踏まえ、中学生の利用時間の延長を行っている。
- ・ コミセンがボランティアで各館独自に運営されていることを知らない人が多いため、利便性の面やコミセン間で対応が違うことに、不満が上がる可能性があるように思う。市民の自主運営であることは、行政側からももっと情報発信が必要だと感じている。

② 地域におけるネットワーク機能

- ・ 緑町にある町内会、UR・都営住宅、商店街、高齢者総合センター、老健（介護老人保健施設）など12団体からメンバーが集まり、毎月「緑懇話会」を開催している。これまでにはコミュニティバスの要望書を出したり、市の防災課職員も呼んで防災に関する意見交換会を開催したりした。緑町はかつてより地域団体が協力して地域のこと（例えば、千川小学校の建て替え、クリーンセンターの建設など）を話し合ってきた歴史があり、関係性のベースがある地域だと感じる。

③ 持続可能な協議会の運営

- ・ 運営委員は良く連携して精力的に活動できている。令和6年7月からの工事休館中にも運営委員会を開催し、再開後の運営について話し合いを設けている。

- ・ 人材不足と高齢化は課題になっている。年に1回のコミセンまつりでサポートしてくれる協力員等はあるものの、コンスタントに運営に携わってくれる人が乏しい。運営委員には緑町在住・在勤を条件としているため、近隣大学に通う大学生などは入ってこれない制約がある。
- ・ できるだけ人材流入をスムーズにするため、かつては総会手続きを経なければ運営委員になれなかったのを、毎月の運営委員会で承認されればすぐに活動できるよう手続きを簡略化した。
- ・ 現在も年間2～3名は運営委員の新規加入があるが、仕事の関係で抜きたいという人もいるのが現状。そのようなときは、辞めてもらうのではなく、名前だけは残して年1回でも関わってもらっている。
- ・ 運営委員としての日々の活動は難しい高齢者にも、ご意見番として時々運営委員会に出席してもらうなど、できる範囲での関わり・繋がりは断ち切らないようにしている。
- ・ しばらく活動を休んでいる運営委員でも、時期によっては関わるのが可能かもしれないため、翌月の分担を考える際に一応声掛けだけは行う。
- ・ アクティブに運営委員として活動できない人であっても、いずれまた活動できるようになるかもしれないと考え、何らかの繋がりは維持している。
- ・ 窓口当番は4時間交代制だが、場合によっては2時間でも良いなど柔軟に対応している。できるだけ、メンバーの事情にも配慮し、心地よくかわってもらえるように工夫している。

④ 総括及び今後期待すること（評価委員会よりコメント）

- ・ 改修による休館中も運営委員会を継続し、協議会のつながりを保っている。
- ・ 少しでも関わりを持てる方には、運営委員やそのほかの関わりでつながり続ける工夫をし、また時期が来れば関わりを持ってもらえるように工夫をしている。また、緑懇話会など地域の結束があり、他の団体からの情報などからも新しい人材のリクルートが可能である。一方で、こうしたコミュニティに入っていないと関わるのが難しくならないように、近隣の大学生など在住要件が障害になる場合は協力員という資格で参加してもらうなど門戸を広げる工夫も期待される。
- ・ 小規模館ながらロビー等フリースペースの利用が多く、市直営の施設との認識で入館する市民も多い等、スポーツ施設に隣接が故の悩みがある。
- ・ 改修工事前の1年間に精力的に今できる活動を行っており、将来的な活動再開に向けた種をしっかりと撒いている。また、今後の窓口業務の再開のための確認作業をすでに計画しているなど、活動再開に向けた適切な準備を行っている。このような取り組みの準備状況は他館の参考になるものと考えられる。

12. ◆八幡町コミュニティ協議会



八幡町コミュニティセンター



Kid's クラフト

① 運営の工夫・利用者(住民)の満足度の向上

- ・ コミセン利用者やコミセンに立ち寄った人にコミセンへの理解を深めてもらうため、「コミセンってどういう場所?」「コミセンではどんなことをやっているの?」といった素朴な疑問について答えるポスターを作成している。また、コミセンで行った事業・行事の実施報告ポスターを作成し掲示している。
- ・ イベントによっては、市報への掲載のほかSNSで告知を行うなど、快適・スムーズな運営を行うための工夫を行っている。市報掲載は事前に市との事務的な手続きが必要であり、SNSの方が機動的に事業実施できるというメリットもある。
- ・ 明るく入りやすいロビーがあることを活かし、子ども(親子)を対象とした事業・イベントを多く行っている。利用者のニーズもくみ取り、次回の事業企画に生かしている。
- ・ ふらっと立ち寄れる雰囲気を大切にしているため、ロビー利用程度であれば利用者名簿への記名は求めている(部屋を借りる場合は個人情報把握)。
- ・ コミセン利用について、営利目的でお断りする場合のボーダーラインが難しい。判断の参考となる、何らかのガイドラインのようなものがあるとよいと考えている。

② 地域におけるネットワーク機能

- ・ 運営委員の中で、青少協、自主防災組織、地域社協といった地域団体との調整窓口担当を決め、普段から連絡を密に取るように工夫している。コミセン関係者と各団体の役員が重複しているケースもある。
- ・ 地域住民へ地域にある様々な団体について周知を行うことを目的に、コミセンまつりで地域団体(21団体)の展示を行っている。
- ・ 地域の小中学校との交流機会を設けている。保護者にコミセンと関わりを持ってもらえるよう、働きかけを行っている。

③ 持続可能な協議会の運営

- ・ 大学生からシニア世代まで、幅広い世代が運営に関わっている。小中学生の保護

者がコアとなっており、全体的に年齢層は若めである。SNSを活用した情報発信等は、若い世代のスキルやアイデアが大いに生かされている。世代の違いによる価値観の違いはあるが、まずはトライしてみることを大切に、よく話し合うことで調和が取れている。

- ・ 吉祥寺東コミュニティ協議会を参考に、保護者の了承があれば高校生や大学生の運営委員参画も可能として募集したところ、大学生が2名の応募が得られた。また、イベントや行事に参加する子どもの保護者に声をかけ、定期的に常に次世代の担い手（運営委員）を探すよう地道に取り組んできた。
- ・ それぞれが可能な時間帯、内容で関わることができるよう、最大限配慮している。窓口担当も必要な時は交代できるよう、お互いに声掛けしやすい雰囲気づくりを徹底してきた。
- ・ 一方で、窓口担当者のスキルの違いから、できる人への作業の偏りと負担が生じている点が課題となっている。窓口担当者の対応の統一のため、マニュアル作成を行うほか、窓口会議でも情報共有・確認を行うようにしている。

④ 総括及び今後期待すること（評価委員会よりコメント）

- ・ 子育て世代の住民が関わりやすいよう、窓口シフトなども、いつ休んでも大丈夫という雰囲気を作り、まだ地域とのつながりの少ない世代にとって子育て等の相談もできる安心できる場となっている。有償ボランティアということも、仕事復帰へのきっかけとして捉えられている面もあるようである。そうした人々が、その後もつながりを持つと同時に、学生の関わりにも力が入れているなど、多世代の幅広いメンバーが、話し合いの中でうまく調和し、中長期的に人材確保・人材育成ができてきている。
- ・ SNSの発信など、広報を上手に行っている。
- ・ 地域団体との連絡調整担当者の配置、小中学校との交流、保護者への呼びかけなど地域コミュニティのハブになることを意識している。「コミセンってどういう場所？」というポスターの掲示など、コミセンへの理解のための取り組みを行っている。
- ・ 若い運営委員が多くいるなかで、運営委員にとっても重要な多世代交流の場となっている。また、SNSでの発信やカフェの実施など新しい取り組みを積極的に実施している。

13. 関前コミュニティ協議会



関前コミュニティセンター



関前コミセンまつりのポスター（部分掲載）

① 運営の工夫・利用者(住民)の満足度の向上

- ・ 通常予約以外に、前日予約、当日予約という形で空いている部屋を適宜利用可能としている。
- ・ レクリエーション室の卓球利用については1時間交代の時間制限を設けて譲り合って使用してもらっている。この際「単独での卓球練習」も可としているが、本来のレク室のあり方（楽しくプレイする場所）とは違うこともあり悩ましく思っている。
- ・ 音楽室は、楽器演奏・コーラス練習に一番人気がある部屋のため、前述の「前日予約」は無しとして「当日予約」のみとし、利用時間も半コマ（1.75時間）としている。ただし、部屋の防音機能が低く学習室が近いこともあり、一部楽器（ドラム等）は利用不可としている。
- ・ 調理室がなく、給湯室しかないため調理については「温め」のみまでとして利用をしてもらっている。

② 地域におけるネットワーク機能

- ・ 利用者団体やヘビーユーザーに声掛けして年に1度利用者懇談会を開催している。
- ・ 音楽室利用者の発表の場を提供するため、「関前ミュージックフェスティバル」を開催している。
- ・ 以下の地域イベントには実行委員会メンバーとして参加協力し地域コミュニティと連携している。地域のつながりが強く、こうしたイベントが継続している。
 - ◇ 関前八幡まつり/花火大会（主催：関前八幡親交会）
 - ◇ 地域運動会（主催：青少協関前南地区）
 - ◇ どんと焼き（主催：青少協関前南地区）
 - ◇ 多摩湖往復ナイトハイク（関前コミュニティ協議会等5団体共催）
- ・ 課題として、コミュニティ活動への関わり自体を望んでいない住民が増えつつあると感じている。

③ 持続可能な協議会の運営

- ・ イベント運営、事務、広報等の各シーンでそれぞれに才能豊かな運営委員がおり、限られた時間を使って良いパフォーマンスを発揮してくれている点で、人に恵まれた協議会である。
- ・ 窓口担当には定年制を敷いているが、人員確保のため弾力的に運営し、定年超過の方に毎年、延長をお願いしている。
- ・ 運営委員には定年制がないため人数は多いが、イベントでは実質的には運営側に回ることは困難になってきている委員もおり、委員間での負担の偏りが出てきている。
- ・ 加齢とともに運営委員から協力員になって残っていただく方も多いが、コミセンだよりの配布要員も足りておらず、動ける方には複数地区を担当してもらっている。
- ・ 個人への過度な負担はやりがいや楽しさの実感を奪うことにもなり、運営委員・役員の担い手不足の直接原因となってしまっている。
- ・ 担い手不足の問題がある一方、事務量は増えている。地域住民から「あんな大変なことはできない」と思われ、ますますなり手が減る。
- ・ SEだったかつての役員が、スタッフが使いやすいように作ったシステムを活用している。
- ・ 地域への情報発信は広報誌の定期発行（2か月に1度、年6回）とホームページによる広報により行っている。
- ・ チラシの投函を嫌がる市民もいるかもしれないが、コミセン便りは市報に準じる大事な媒体ではないかと考えている。コミセン便りの配布に対するクレームによって運営委員や協力員のモチベーションが下がらないよう、モチベーションを維持してゆくことが課題である。

④ 総括及び今後期待すること（評価委員会よりコメント）

- ・ 継続した地域とのつながりがあり、祭りや運動会などをはじめとした地域で定着した恒例の季節イベントがコミセンの存在とコミュニティ維持の節目になっているのは、歴史の重みがあればこそであり、コミュニティ形成の重要な役割を担っている。一方そうしたことへの参加を望まない住民が増えつつある中、地道な活動が功を奏している。
- ・ 役員の負担を分担できる仕組みの検討や学生を含む若い年代の担い手の確保を期待したい。
- ・ 館利用者にコミュニティ活動への参加を呼び掛けている取組みは、コミュニティ活動を面倒くさいものであると感じたり騒音と感じているかもしれない他の利用者の理解を得ることにつながる試みだと思う。

14. 西部コミュニティ協議会



西部コミュニティセンター



ちびっこ運動会

① 運営の工夫・利用者(住民)の満足度の向上

- ・ 大型館かつ体育室もあるため、利用用途が広い点が特徴である。事業としては、コミセンまつり、映画会、文化祭、ちびっこ運動会、コンサート等を行っている。
- ・ 窓口対応が良く、子育て世代にも優しいという声が寄せられている。
- ・ 利用者目線で利用ルールを設定しているが、大人目線に偏っているように感じる部分もあるため、今後は障害者や子どもの目線を考慮したルール設定も検討したい。
- ・ シニア世代からは、利用条件やイベントが若者寄りになっているという意見が寄せられており、現在は改修による休館中であるが、リニューアルオープン後に改めて利用者懇談会を開催したいと考えている。一方で、不満を抱えている利用者は何も言わずに去ってしまうため、改善に向けた意見を聴取できない点が課題である。

② 地域におけるネットワーク機能

- ・ 児童青少年課への相談をきっかけに、昨年のちびっこ運動会から「中高生ボランティア」に手伝ってもらっている。ボランティア証明を発行することで、リピーターとして翌年もボランティアとして参加してくれる子や、コミセンまつりも手伝ってくれる子もいた。運営委員の知り合いの中高生に声掛けをして手伝いを依頼するケースもある。
- ・ 児童館や団地の自治会、社協福祉の会、青少協・PTA、防災等の団体とコミセンの運営委員を兼任している人が多く、これらの団体との繋がりを大切にしている。コロナ禍でこれらの地域の活動が途切れてしまったため、繋がりを再構築する必要がある。
- ・ 委員の年代が若い層と高齢層に二分しているため、中間の年代の委員を増やしたいと考えている。

③ 持続可能な協議会の運営

- ・ 運営委員・窓口担当ともに少なく、イベント時のボランティアも不足している状況である。担い手が不足しているため、これまでは新しく運営委員として就任す

るには総会での承認が必要だったが、毎月の運営委員会で承認できるよう規約を変更した。

- ・ 子育て世代は、子どもが小さいうちはコミセンを利用していることもあり、手伝いに来てくれるが、子どもが成長するにつれて離れてしまうことを悩ましく思っている。夜間に運営委員会を実施する等参加しやすくなるように工夫はしているものの、担い手の増加に繋げることが難しい。
- ・ 利用者、運営委員ともに変化を嫌う人が少なくなく、前例踏襲を求められることが多い。若い世代を呼び込むためにも立場や役割の固定化を無くしていく必要がある。
- ・ 多くのコミセンが大規模改修の時期を迎えている。西部コミセンでも改修に向けた準備や片付け等で苦勞したため、改修に係るマニュアル類があると良いと感じた。
- ・ 大規模改修による休館により、協議会の活動が行われないと再開時にメンバーが戻ってくるか不安がある。

④ 総括及び今後期待すること（評価委員会よりコメント）

- ・ 子どもたちがロビーに集う児童館的な居場所づくりから、子どもの時間を設けた体育室のスポーツ利用まで、子どもたちの多様な要望に応えている。
- ・ 子どもたちが利用しやすい館であるつながりから、子どもやその保護者たちも、運営に関わるのも楽しいと感じてもらえるような運営ができると良い。
- ・ 運営委員の事業への意識に世代間のギャップがあるという部分では、運営の部会をそれぞれに作るなど工夫があると良いのではないかと考える。「中高生ボランティア」の活動や子ども関連の地域団体との交流企画など活動を展開して評価してもらい、その評価をもって高齢層への理解を図ることも考えられる。
- ・ 前例を重視して運営していくという発想と、新しいチャレンジをしていこうという発想がぶつかっていることに悩みを感じている中で、互いに意見を述べやすい環境づくりや実践を行おうとしている点に期待している。たしかにデジタル対応やジェンダー問題などで理解が進まない部分もあるが、その取組みの価値は確実にあるものであり、ぜひチャレンジし続けていただきたい。

15. 境南コミュニティ協議会



境南コミュニティセンター



境南コミセン文化祭

① 運営の工夫・利用者(住民)の満足度の向上

- ・ 「体育室・部屋ともに、できるだけ使ってもらう」「利用者の意見を笑顔で丁寧に聞く」などを目標にして、施設の安全・子どもたちの安全には常に留意するよう努めている。一方で、以前は安全上の理由から断っていた親子連れの体育室の利用を受け入れる等の改善を行っている。
- ・ 窓口対応については、毎月窓口会議を行い、日々の運営の問題・課題を話し合って改善を図っているものの、地域住民の潜在的ニーズのくみ上げや満足度判断を定量的に把握できていないことが課題と認識している。
- ・ コミセン同士でも他のコミセンでどのような活動が可能なのかについての把握は十分ではなく、誤った情報により他のコミセンから誘導されてくる利用者も少なくないため、ホームページ等でコミセンごとに可能な活動が一覧化されていれば利用者の利便性が向上すると思う。

② 地域におけるネットワーク機能

- ・ 運営委員は、境南町1～5各丁目（原則各4名）と地域の23団体（各1名）で構成され、4部会（広報・成人活動・地域対策・青少年）もしくは2特別委員会（スポーツ・自主防災）のいずれかに所属し、それぞれ活動することとなっている。それぞれの地域団体の代表が集まっているため組織的であり、昔ながらのボランティア精神が続いているように思う。
- ・ コミセンの近隣には小学校が1つしかなく、学校区域（小学生主体）としても重なっているため、地域としてのまとまりがある一方で、閉鎖的になるという側面もあることから、開かれたコミセンを目指したいと考えている。
- ・ 周辺の新築マンションの住民である親子連れの利用者は多い一方で、コミセンそのものを知らない方もいることを課題に感じている。
- ・ 地域の団体が利用できるロッカーを設置している。

③ 持続可能な協議会の運営

- ・ 新しい人は、応募や既存の運営委員の紹介により入ってくることが多い。協議会内の人間関係、環境作りには配慮している。

- ・ 運営委員・協力員の人数は確保されているが、児童・生徒の保護者世代は忙しく、定着が難しいため、主なイベントではメンバー・参加者が固定化している傾向が見られる。
- ・ コミセンの運営に関わる人の高齢化が大きな課題である。
- ・ 窓口は現在の人数で対応できているものの、人員は不足していると感じている。
- ・ 昨今の物価上昇に対して、相対的に窓口手当が低いと感じている。窓口の若返りに向けて若い人を呼び込むためにもインセンティブとしての増額が必要だと思う。

④ 総括及び今後期待すること（評価委員会よりコメント）

- ・ 運営委員選出が丁目と団体で組織化されている中で、地域の団体が高齢化していることが課題となっている。そのうえで、保育施設や小学校の保護者もそのような形で関りをもってもらえていることが強みであると思われる。一方、関わりの継続が困難なそうした若い世代との有機的なつながりを持ち続けるため、若い世代の課題ややりたいことを取り上げるといった工夫に期待したい。
- ・ 窓口担当について、子どもがいても関わるといった融通が利く、社会との関わりが持てる場として機能できると良い。
- ・ 親子連れの利用拡大、親しみやすさへの努力に加え、利用を促す意味でもコミセンがどのような場所か知ってもらう周知活動がさらに継続されると良い。
- ・ 地域団体のロッカーを用意するなど、地域のハブとしての位置づけが非常に明確なコミセンである。その運営ノウハウをぜひ他館と共有していただきたい。

16. 桜堤コミュニティ協議会



桜堤コミュニティセンター



夏まつり

① 運営の工夫・利用者(住民)の満足度の向上

- ・ 小規模でアットホームなコミセンである。小規模ながらも長く受け継がれた事業を継続し、地域との交流を大切に運営している。
- ・ 武蔵野市のはずれにあり、コロナ禍を経て若干利用者が減少している。イベントを通じて利用者を増やすべく、夏祭り等を開催している。
- ・ 地域住民に気軽に参加したいと思ってもらえるようなポスターを作成し、なるべ

く多くの人の目に触れるよう様々な場所に掲示している。

- ・ 事業やイベントを行うたびにアンケートを実施しており、そこで見出された課題は次回改善できるようにしている。
- ・ 夜間利用が少ないコミセンであり、現在9:00~21:00で開館しているものの、9:00~20:00に短縮してもよいのではないかと考えている。

② 地域におけるネットワーク機能

- ・ 夏まつりは、PTA、青少協、地域のケアハウス等の地域の協力団体からも70名ほど運営サポートに入ってくれた。事業は地域の団体の協力を得ながら実施し、普段から交流を深めておくことを意識している。そこでできたネットワークを生かして「災害時地域支え合いステーション」の運営へとつながるとよいと考えている。
- ・ 子どもの利用が少ないコミセンである。子どもや若者とのつながりを作ることができるよう、親子向けのイベントを開催したり、老人クラブのイベントに子どもにも参加してもらい、大人と子どもでチームを作って遊んだりしている。また、コミセンの部屋でスタンプラリーを行ったり、イベントにパフォーマーを呼んだりすることで、子どもに参加してもらう話題・きっかけづくりを心掛けている。
- ・ 令和7年度は近隣の児童館が休館となるため、ニーズをくみ取りつつ、子ども向け事業を充実させたい。
- ・ 1回参加して終わりではなく、また継続して利用してもらえそうな仕掛けを考えている。

③ 持続可能な協議会の運営

- ・ 運営委員の人手不足が課題である。特に若い男性が少なく、力仕事の面で苦勞することがある。
- ・ コミセンに来る子どもの父親に声掛けを行っており、特に子どもが中高生であると余裕があってコミセンに関わってくれる男性もいるが、十分にリクルートできているわけではない。募集をして応募を待つ、という方法ではなかなか人材確保につながらない。
- ・ フルタイムで仕事をしながら運営委員（特に役員）として関わることは難しい。ただし、定年前に細くとも繋がりを作っておくことが大切で、地域に関心があれば時間ができた際に（定年退職後等）コミセンに関わってくれる可能性もある。将来に向けた種蒔きだと考えて、長い目で繋がりづくりを行っている。
- ・ 役員になるかどうかで、同じ運営委員であっても負担感は大きく異なる。役員になるハードルは高く、今後役員が担当している役割をもう少し他の運営委員に分担してもらうなど、業務改革が必要だと感じており試行中である。
- ・ 運営委員はボランティアであるため、強制して行ってもらうものではない。運営委員として活動することにも家族の理解が必要であることは意識している。
- ・ 得手不得手や参加可能な時間は運営委員によって様々である。いろいろな参加パターンで関わることを周知するようにしている。
- ・ 令和6年は亜細亜大学のボランティアセンターを通してイベント補助スタッフの募集を行い、大学生3名がお手伝いに来てくれた。イベント企画は運営委員が主

導していることから、そこに参画してもらうことはできなかったが、イベント当日は主体的に運営に関わってくれた。

④ 総括及び今後期待すること（評価委員会よりコメント）

- ・ 小規模館ならではのきめ細かい運営がなされている。イベント開催には地域団体のサポートも得られており、広く認知されている。同一地域内にある児童館が改修・休館予定であることをチャンスととらえ、子どもの利用増と保護者世代の認知度向上につながり、新たな参加のきっかけとなることを期待したい。
- ・ 役員の負担が大きく、イベントの再検討や事務等のマニュアル化、代表の分担制など、仕事を持っている人でも関わるができる方法の検討を今後も続けていただきたい。
- ・ 地域のネットワークを生かした「災害時地域支え合いステーション」運営への取り組みを行っている。
- ・ 目の前の公園との一体的な運用も可能な点に特徴がある。公園の管理部門との折衝は大変な部分もあるが、ぜひ地の利を活かした新しい活動を展開していただきたい。

第4章 総評

武蔵野市では、昭和46年にコミュニティ構想が提起されて以来、市民の自発的なつながりによるコミュニティづくりを推進してきた。これは、他の自治体にみられるような町丁単位で全戸加入を原則とした町内会・自治会は設けず、あくまでも市民の自主性を尊重し、自発的なコミュニティや市政への関りを通して地域コミュニティにおける関係性を構築し、市民を社会に包摂していくという武蔵野市の基本的な考え方に基づくものである。このコミュニティづくりの中心的役割を担い日々活動しているのが有志の市民ボランティアによって構成される16の協議会である。

協議会はそれぞれがコミセンの管理運営を指定管理者として担いつつ、自主参加、自主企画、自主運営という自主三原則に基づき、各地域においてそれぞれ特色のある活動を一貫して行っている。

協議会が管理運営を担うことにより、コミセンが単なる公共の貸館施設ではなく地域のニーズに合わせた利用方法によって自由に使用できる施設となっている。このことは、武蔵野市では当たり前のサービスと感じている市民も多いが、協議会の長年の活動の成果である。

また、この活動により、市民自治という武蔵野市の市政運営の基本原理が、幅広い市民の間で徐々に培われ、市民自治の実践が根付いてきていることは大いに評価してよい成果である。

一方で、近年では市民のライフスタイルの変化や地域課題の複雑化・多様化により、福祉、子育て支援、青少年健全育成、防犯・防災、環境、まちづくり等の幅広く、かつ、専門性を必要とする分野でも、市民による自主的な活動と行政が連携・協働する必要が増してきている。こういった地域コミュニティやボランティアの意味が変わりつつある中で、各協議会ではコミセンという場を生かした新しい取り組みを行い、より一層の役割を果たしている。具体的には、体育室などでの子どもの居場所づくり、地域の課題を団体や個人が同じ立場で話し合う地域フォーラムの開催、災害時地域支え合いステーションへの取り組み、親子ひろばの開催などが挙げられる。

このような中、新型コロナウイルス感染症により、令和元年度末から令和2年度の夏にかけてコミセンの一斉休館が余儀なくされるなど、コミセンの運営において想定しなかった事態が発生し、コミュニティ活動にとって苦難の時期が続いた。この間に市民の生活にも変化が起き、全ての運営委員が活動に復帰できたわけではない。しかし、コロナ禍は対面の人間関係やコミュニティの大切さが再認識される機会にもなり、コロナ禍が落ち着いた令和5年度途中からは各コミュニティ協議会は本格的にその活動を再開し、さらにはこの経験を踏まえて、ITをより積極的に活用するなど新しい実践に活かしている。

コロナ禍を乗り越えた今では、コミセンの大規模改修に伴う長期休館による協議会の活動休止や多様化する地域ニーズへの対応などの課題に直面している。その中で協議会の活動を維持し、より発展させていけるよう、評価委員会で特に取り上げて議論を行った事項について、各々の関係主体に対して以下に提言を行う。

1. 全体に共通する事項について

(1) コミュニティ協議会に対する市民の理解

① 現状について

各協議会においては、コミセンが市民のボランティアによって構成される協議会によって運営されていることや、利用者もいつでもそのボランティアに加わることができることをコミセンだよりや各コミセン窓口での「ボランティアで運営している」旨の掲示等により周知する努力を行っている。また市でもリーフレット「コミセンってなんだ」を市民課で転入者に配布しているほか、月2回全戸配布される市報でも、協議会の事業案内を掲載するなど周知に努めている。

しかし、コミセンがボランティアで運営されていることを知らない方や全てのコミセンが同じ運営をしていると思っている方は多い。そのため、例えば各コミセンの利用ルールは地域性を踏まえて施設ごとに自主的に決められていることや、予約が窓口でしかできない点も市民同士のコミュニケーションのきっかけとしては意味があることなど、武蔵野市のコミュニティづくりの理念によって現在のコミセンそれぞれが独自の運営がなされていることが市民・利用者に必ずしも十分に伝わっていないという現状がある。

加えて、協議会からは市職員に対しても、コミセンへの理解を深めてほしいとの意見も出ている状況である。

この傾向は、コミセンに対して一定の理解がある利用者のアンケート調査の結果においてはコミセンが地域住民によって運営されていることの認知度が8割を超えている一方で、無作為抽出市民アンケートの結果においてはおおむね6割程度と、令和元年の調査結果とほとんど変化がないということからも読み取ることができる。

② 今後に向けて

(ア) コミュニティ協議会による取組み

- ・ 協議会による、協議会やコミセンについての周知の取組みは、引き続き各地域の状況に合わせて継続して行われることに期待する。

(イ) 行政に求められる取組み

- ・ 武蔵野市では、なぜ地域住民のボランティアである協議会がコミセンを運営し、コミュニティづくりに取り組んでいるのか、その成り立ちや意義について改めて周知するなど市全体として武蔵野市におけるコミュニティの位置づけや意義を発信する必要がある。
- ・ 協議会の果たしている公共的役割を市は正しく理解し、その取組みの意義を率先して尊重すべきである。
- ・ 市の職員に対し、武蔵野市のコミュニティ施策やコミセンへの理解を深める取組みを行うべきである。
- ・ コミセンの管理運営が、地域住民のボランティアである協議会の気遣いや地域と

の関わり合いの中で成り立っていることについて、市はより積極的に評価をし、周知する必要がある。

- ・ 各コミセンの利用のルールや運営方法の違いは、市民にとってはわかりにくい面もある。しかしその違いには各協議会の考え方を反映してる部分もあることから、その背景となる武蔵野市のコミュニティづくりの特色を一層工夫して周知することが求められる。

(2) コミュニティ協議会運営のあり方について

① 現状について

各協議会の事務作業については、大きく①指定管理業務に関わるもの、②武蔵野市コミュニティ研究連絡会に関わるもの、③協議会自らの活動のためのもの及び④その他のものに分けられる。

①～④それぞれ、例月やまたは特定の時期にのみ行われるが、特に①では3～4月に管理運営費の清算や補助金の請求、③では事業計画やその実施及び報告、予算や決算などの住民総会の資料作成といったものが集中する時期がある。

また、市とのやり取りにはメールを用いることが多く、資料はパソコンを用いて作成することがもっぱらである。この連絡や資料作成のデジタル化は効率的な事務処理を可能にするものであるが、不慣れな運営委員にとっては大きな負担である。

以上の事務作業は、多くの運営委員は協議会に参加した当初には想定しておらず、活動経験を重ねるにつれて任されるようになるため、役割や作業量を負担に感じ、運営委員としての定着に影響し、こうした事務を主に行う協議会の役員の担い手不足にもつながっている状況がある。また、事務負担だけでなく役員は地域団体の会議への出席など地域での役割も担うことから、フルタイムで勤めている方が役員を担うのは難しいという意見もある。

また、武蔵野市のコミセンが地域ごとのボランティアの住民による協議会によって運営されていることは、そのやりがいや楽しさがあるからこそ継続できているものである。ルール作りを含めて自由に自主的に取り組めることが、運営の意欲や創意工夫につながっていると考えられる。ただし、各コミセンによって各種ルールが違うことは、複数のコミセンを利用する利用者や市民にとっては理解されにくい面があり、その違いの必要性を含めた丁寧な説明や市によるわかりやすい情報提供を要する点でもある。

② 今後に向けて

運営委員のパソコン操作などのスキルには大きな違いがあること、また、予算・決算や住民総会の資料作成などの事務作業が一時期に集中することを前提として、より効率的で負担感の少ない運営のあり方を模索する必要がある。

一方で、協議会ごとに異なる施設利用のルールについて、共通化と自主の範囲との関係性をどのように考えるかについては議論があった。こうした課題に対して、委員の中には、予約受付方法など一定程度ルールの共通化を目指してもよいのではないかと

という意見も出された。基本的には各協議会が地域ニーズ等も踏まえ自主的に決定してくるものであるが、コミュニティ研究連絡会等を通じた情報共有によって、現状の各々のルールの有効性や一定の共通化を検討してみることも価値があると思われる。

また、無作為抽出市民アンケートの結果からは、コミセンの機能として、「同じ関心を持った人と幅広くつながりができる」ことを求める割合が高いことが示されている。コミセンの今後の活動において参考となるため、同じ関心を持つ人との新しい多様なつながりをコミセンにおいてどう作り出すかについても意識していただきたい。

(ア) コミュニティ協議会による取組み

- ・ 資料の作成についての引継ぎとスタッフの育成に期待したい。
- ・ 作業の分担と協力し合える組織運営づくりを進めていただきたい。
- ・ 各コミセンの利用ルールを互いに共有しながら、利用者の変化も踏まえて現状のルールを点検するとともに、利用者側と運営側の双方に利点のあるわかりやすい受付方法等の検討に取り組んでいただきたい。

(イ) 行政に求められる取組み

- ・ 市職員と協議会の安定した関係性の構築に向けた取組みとして、職員への研修や、特に若い職員のコミセン業務やイベント時スタッフとしての体験等を検討されたい。
- ・ ③に影響がでないようコミセンに依頼する作業、特に①に関わる事務作業の精査や整理が必要である。

(3) 人材の確保について

① 現状について

人材の確保については、ほとんどの協議会において課題となっており、運営委員会に出席し、事業を企画し実施するなど、協議会の運営の中核を担う運営委員の確保については各協議会で様々な工夫が行われている。小学生の子を持つ母親が参加しやすい状況を作ることや学生に運営委員を担ってもらい、誰でもできるようマニュアルを作る、エリアを区切らず受け入れる、カフェの企画をきっかけづくりとするなど、協議会によって様々な取組みが行われている。このような魅力的な活動や雰囲気づくりに努めているところが多い一方、現状では、協議会からは企画運営を行う運営委員の数が少ないといった意見もあるほか、運営委員の人数などから窓口当番を回すのも厳しいとか、窓口担当を担う運営委員の確保の面から窓口当番手当の見直しが必要ではないかという意見もみられた。働き方が変化するなかで、あらゆる公共的な市民活動の担い手の不足が指摘されているが、協議会も様々な取組みをしつつも同様の課題を抱えていることが改めて確認された。

評価委員会における議論では、協議会の継続的な活動のためには、関わる人を増やしていくことの重要性が指摘された。また、要望が多かった窓口当番手当の増額については、非常に長期にわたって窓口当番手当の金額が一切変更されてこなかったことへの疑問が呈されるとともに、手当についての位置づけを確認するなかで、有償ボランティアとしてのあり方についての議論もあった。手当の金額だけでなく、なぜ有償

ボランティアであるかの意味を改めて確認するべきであることも明らかとなった。

② 今後に向けて

(ア) コミュニティ協議会による取組み

- ・ 運営委員としてのやりがいや魅力などについて一層積極的にアピールするとともに、各地域コミュニティの実情を踏まえ様々な経路での参加の呼びかけを期待したい。
- ・ コミセンのイベントの参加者にもボランティアとして参加できることの周知の取組みは重要である。
- ・ 各協議会での好事例等の取組みを共有し、各コミセンが活用できるような取組みが必要である。
- ・ 窓口当番手当は有償ボランティアに対する実費弁償を含む謝礼であるという認識のもと、ボランティアが手当目的とならないように、その位置づけを意識することが大切である。
- ・ 窓口当番は、常時2人という少ない人数で、時には非常対応を行わねばならないことから、求められる能力の精査及びマニュアル等の整備が大切である。
- ・ 多様な参加の仕方についても研究を行うことが必要である。
- ・ 協議会の中には、大学生や高校生が運営委員として参加している事例もあるため、協議会同士の情報共有や大学や小中高校との連携を通じて、学生や生徒の活躍の場の拡大についても検討が進むことが期待される。

(イ) 行政に求められる取組み

- ・ 窓口当番手当は給与ではないことから、最低賃金とは分けて考える必要があるものの、インフレ率などを踏まえて、実費弁償として適当な額であるかを定期的に見直す必要がある。
- ・ 一方で、窓口当番や運営委員を市職員と思う利用者もおり、その対応に負担を感じているケースも見られたため、コミセンの利用者等に対し、協議会は行政サービスの提供として窓口当番を行っているのではないことを周知する必要がある。

(4) コミュニティ協議会同士の情報共有

① 現状について

協議会によっては、窓口業務マニュアルの作成や、運営委員としての学生の参加、SNS を活用した広報及び中高生ボランティアの参加など、コミュニティ活動のより一層の活性化につながる取組みを行っている。こういった好事例やノウハウを各協議会間で情報共有し、活用できるような仕組みがあると良いと考える。

② 今後に向けて

各協議会のバックアップのため、コミュニティ研究連絡会又は市民活動推進課において、事項ごとに各協議会の取組みを調査・収集し、それを各協議会にフィードバック

クを行えるような仕組みについて検討を行ってほしい。好事例の共有はとても有効である。

2. 行政に対する提言について

- ・ 武蔵野市では、長らく地域住民のボランティアである協議会が運営するコミセンが市の公共施設として当たり前存在する環境があり、その中で市職員は働いてきている。しかし、コミセンの存在は、当たり前であり続けることの意識や熱意、活動への努力によるものである。
- ・ 行政と地域コミュニティとの連携は子ども・子育て支援、教育、健康福祉、都市整備など市政の根幹をなすあらゆる領域において重要である。同時に、武蔵野市では行政が町内会や自治会の組織化には関与せず、コミュニティづくりの拠点としてコミセンを構想し、地域住民のボランティアである協議会がコミセンの設計段階から主体的に関わり、建設後の運営まで担うという他の自治体にはない特徴をもつ。この武蔵野市のコミュニティのあり方は、第一期長期計画以降の長期計画、コミュニティ構想、武蔵野市コミュニティ条例において一貫して維持してきた方針である。全ての市職員は、なぜ武蔵野市がこのようなコミュニティづくりを構想し維持してきたのか、その理念と経緯をより深く理解したうえで、現場で触れ合う市民と協働することが求められる。
- ・ 協議会と市との関係における多くの課題は、市の部署間での調整で解決が十分可能と考えられるため、協議会の活動の公共的な意義を踏まえ担当部署間で十分な意思疎通を図った上での丁寧な対応を求めている。例えば公園等が隣接するコミセンにおいては、公園管理に関して市の担当部署と協議会とのやり取りに課題があることが指摘された。また、今後役割が増してゆくと想定される災害時の対応や防災対応についても、協議会と市担当部署との意思疎通が不可欠となる。さらに、今後さらなるコミセンの大規模改修や建替えが想定されるが、工事が長期休館を伴う場合、協議会は活動の機会が減少し、運営委員の維持ができるか不安を感じている協議会も多い。こうした場合に、近隣の公共施設のスペース等において会議を行うことができるようにするなど、活動の持続性のための支援や市の部署間での調整が今後も必要である。
- ・ また、市は、武蔵野市のコミュニティづくりのあり方の独自性について、広く市民に広報するとともに、理解促進や啓発の取組みをさらに工夫する必要がある。協議会に関わりうる地域住民や利用する市民等に対して、正しい情報の周知を行うことも市の責務である。同様に、コミセンの大規模改修・建替えに伴う検討や、その後のリニューアルオープンについては、市民の関心を促す好機ととらえ、積極的な広報展開や市民参加機会の創出を意識的に行うことが必要である。
- ・ 窓口当番の手当ての多寡については、各協議会で様々な意見があるが、長年変更がなかった金額については検討すべきであろう。

3. 市民への提言について

- ・ 武蔵野市の地域におけるコミュニティづくりは、行政である市が主導するのではなく、市民同士の対話や交流を通じて市民自身の手によってもたらされるものであることを理念として掲げている。そのため、武蔵野市は他自治体のように行政が設置した区分である町丁に基づく町内会、自治会を戦後に復活させず、地理的な条件を設定せず多様な市民によるコミュニティづくりを目指してきた。
- ・ この理念を体現する空間の一つである武蔵野市のコミセンは、武蔵野市のコミュニティ構想に基づき、市民の誰もが自由に利用できる多目的施設として設置された。各館の管理運営は地域住民のボランティアによって構成される協議会が担っており、各地域のコミュニティ活動や情報発信など、コミュニティづくりの拠点として利用されている。
- ・ コミセンは、多目的室、会議室、学習室、調理室など様々な部屋があり、目的に応じて無料で利用することができる。これらの設備はここでの活動を通じて人々をつなげコミュニティをつくるための基盤として準備されたものである。
- ・ 第1号のコミセンができてから令和6年で48年と、武蔵野市独自のコミセンは、武蔵野市ではその存在が当たり前になっているが、コミセンは利用者と同じ市民である地域住民による協議会が指定管理者として運営する施設である。コミセンを利用する側も、施設を管理運営する協議会に目を向けていただくとともに今一度コミセンの目的を再確認していただきたい。
- ・ そして、「市民参加」という武蔵野市全体の、そして武蔵野市のコミュニティづくりの理念を理解していただきたい。もし、コミュニティづくりに関わっている市民と、その他の市民とで意識のギャップがあるならば、それは様々な対話と、市民参加の経験を通じてそのギャップについて理解し、可能であればその解消を進めていく必要がある。
- ・ まずはコミセンを知り、使ってみたりイベントに参加することをきっかけに地域の一員として関わる市民が増え、さらにコミセンの活動をつくっていただけることが、この評価委員会の希望でもある。

資料編

1. 議論の経過

日程		概要
第1回	令和6年5月28日	(1) 評価委員会の運営について (2) 武蔵野市のコミュニティづくりの取組みについて (3) 評価の目的及び進め方等について (4) これまでの評価委員会の報告等について (5) 無作為抽出市民アンケートについて (6) 利用者アンケートについて ほか
施設見学	令和6年6月9日 29日	
利用者アンケート		令和6年6月 14 日～8月 22 日
無作為抽出市民アンケート		令和6年6月 14 日～7月 31 日
第2回	令和6年7月30日	(1) コミュニティセンター視察の振り返り (2) アンケート調査報告(速報) (3) 意見交換会における視点・議題の確認 ほか
意見交換	令和6年9月13日 14日	
第3回	令和6年10月24日	(1) コミュニティ協議会との意見交換会の振り返り (2) アンケート調査報告(最終値) (3) 評価のとりまとめ方針 (4) 報告書の構成について (5) 全体に共通する論点について ほか
第4回	令和6年11月21日	(1) 全体に共通する論点について (2) 報告書素案について ほか
第5回	令和6年12月26日	(1) 報告書素案について ほか
第6回	令和7年1月30日	(1) 報告書最終版について (2) 第五期コミュニティ評価委員会の振り返り、総括

2. 各コミュニティ協議会の概況

(1) 吉祥寺東コミュニティ協議会

① 吉祥寺東コミュニティセンター 施設概要

所在地	吉祥寺東町1丁目12番6号	開館時間	9:15~21:15
開設年月日	昭和53年4月22日	休館日	年末年始、第4水曜
敷地面積	772.47㎡	延床面積	243.35㎡
主な設備	ホール、児童室、和室、ロビー等		

② 吉祥寺東コミュニティセンター 利用者数の推移

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	317	252	345	346	346
総利用人数(人)	21,981	5,034	8,620	10,844	12,541
開館1日あたりの平均利用者数(人)	69.3	20.0	25.0	31.3	36.2

③ 主な事業

- ・ つどい
- ・ アジアを知ろう
- ・ 吉祥寺東落語会 等

(2) 本宿コミュニティ協議会

① 本宿コミュニティセンター 施設概要

所在地	吉祥寺東町3丁目25番2号	開館時間	9:00~21:00
開設年月日	平成4年2月15日	休館日	年末年始、木曜
敷地面積	925.52㎡	延床面積	720.19㎡
主な設備	和室、学習室、子ども室、多目的室、調理室等		

② 本宿コミュニティセンター 利用者数の推移

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	276	224	304	307	307
総利用人数(人)	41,799	7,106	10,517	21,482	29,272
開館1日あたりの平均利用者数(人)	151.4	31.7	34.6	70.0	95.3

③ 主な事業

- ・ 背骨コンディショニング教室
- ・ 陽だまりカフェ
- ・ 本宿子ども劇場 等

(3) 吉祥寺南町コミュニティ協議会

① 吉祥寺南町コミュニティセンター 施設概要

所在地	吉祥寺南町3丁目13番1号	開館時間	9:15~21:15
開設年月日	昭和58年3月28日	休館日	年末年始、第2、4、5水曜
敷地面積	1,447.21㎡	延床面積	1481.64㎡
主な設備	会議室、調理室、多目的ホール、和室、茶室、学習室、スタジオ、サロン等		

② 吉祥寺南町コミュニティセンター 利用者数の推移

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	301	240	330	329	329
総利用人数(人)	78,082	20,862	64,660	60,212	54,818
開館1日あたりの平均利用者数(人)	259.4	86.9	195.9	183.0	166.6

③ 主な事業

- ・ パソコン教室
- ・ 南町健康増進講座
- ・ 南町ふれあい企画 等

(4) 御殿山コミュニティ協議会

① 御殿山コミュニティセンター 施設概要

所在地	御殿山1丁目5番11号	開館時間	9:00~21:00
開設年月日	昭和57年2月4日	休館日	年末年始、月曜
敷地面積	561.88㎡	延床面積	606.87㎡
主な設備	会議室、和室、レクリエーション室、学習室、ロビー等		

② 御殿山コミュニティセンター 利用者数の推移

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	278	223	302	304	304
総利用人数(人)	24,131	3,459	6,335	10,039	13,784

開館1日あたりの平均利用者数(人)	86.8	15.5	21.0	33.0	45.3
-------------------	------	------	------	------	------

③ 主な事業

- ・ みんなでカフェ
- ・ 趣味の会
- ・ 健康麻雀 等

(5) 本町コミュニティセンター協議会

① 本町コミュニティセンター 施設概要

所在地	吉祥寺本町1丁目22番2号	開館時間	9:30~21:30
開設年月日	昭和54年6月16日	休館日	年末年始、日曜
敷地面積	267.76㎡	延床面積	507.02㎡
主な設備	会議室、和室、サロン等		

② 本町コミュニティセンター 利用者数の推移

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	278	223	302	304	304
総利用人数(人)	24,131	3,459	6,335	10,039	13,784
開館1日あたりの平均利用者数(人)	86.8	15.5	21.0	33.0	45.3

③ 主な事業

- ・ まちをきれいに
- ・ ふれあい講座
- ・ ふれあい交流会 等

(6) 吉祥寺西コミュニティ協議会

① 施設概要

ア 吉祥寺西コミュニティセンター

所在地	吉祥寺本町3丁目20番17号	開館時間	9:00~21:00
開設年月日	平成元年2月18日	休館日	年末年始、木曜
敷地面積	1194.62㎡	延床面積	911.67㎡
主な設備	会議室、和室、プレイルーム、学習室、サロン、ロビー等		

イ 吉祥寺西コミュニティセンター分館

所在地	吉祥寺本町4丁目10番7号	開館時間	9:00~21:00
開設年月日	平成4年3月25日	休館日	年末年始、木曜
敷地面積	264.45㎡	延床面積	81.51㎡
主な設備	集会室等		

② 利用者数の推移

ア 吉祥寺西コミュニティセンター

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	281	224	309	307	307
総利用人数(人)	34,188	7,699	13,064	14,788	19,109
開館1日あたりの平均利用者数(人)	121.7	34.4	42.3	48.2	62.2

イ 吉祥寺西コミュニティセンター分館

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	281	224	309	307	307
総利用人数(人)	4,255	1,127	2,193	3,125	3,364
開館1日あたりの平均利用者数(人)	15.1	5.0	7.1	10.2	11.0

③ 主な事業

- ・ あじさいひろば
- ・ あそぼうよ
- ・ ホットCafeシェ・モア 等

(7) 吉祥寺北コミュニティ協議会

① 吉祥寺北コミュニティセンター 施設概要

所在地	吉祥寺北町1丁目22番10号	開館時間	9:00~21:00
開設年月日	昭和54年6月1日	休館日	年末年始、月曜
敷地面積	1745.02㎡	延床面積	1402.51㎡
主な設備	会議室、調理室、視聴覚室、体育館、和室、学習室、ロビー等		

② 吉祥寺北コミュニティセンター 利用者数の推移

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	279	223	307	78	307
総利用人数(人)	60,406	9,173	19,082	5,306	35,916

開館1日あたりの平均利用者数(人)	216.5	41.1	62.2	68.0	117.0
-------------------	-------	------	------	------	-------

③ 主な事業

- ・ 輪のひろば
- ・ パソコン学習会
- ・ ボッチャ 等

(8) けやきコミュニティ協議会

① けやきコミュニティセンター 施設概要

所在地	吉祥寺北町5丁目6番19号	開館時間	9:30~21:30
開設年月日	平成元年12月16日	休館日	年末年始、水曜
敷地面積	831.98㎡	延床面積	585.97㎡
主な設備	キッチンルーム、工作室、こどもルーム、和室、ギャラリー、学習室、ロビー、ホール等		

② けやきコミュニティセンター 利用者数の推移

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	76	223	307	306	307
総利用人数(人)	13,135	12,556	24,117	31,156	36,981
開館1日あたりの平均利用者数(人)	172.8	56.3	78.6	101.8	120.5

③ 主な事業

- ・ けやき茶社
- ・ ナイトウォーク
- ・ ゲームを楽しむ会 等

(9) 中央コミュニティ協議会

① 施設概要

ア 中央コミュニティセンター

所在地	中町3丁目5番17号	開館時間	9:30~21:30
開設年月日	昭和57年2月6日	休館日	年末年始、水曜
敷地面積	978.00㎡	延床面積	1353.18㎡
主な設備	会議室、調理室、和室、茶室、学習室、ロビー等		

イ 中央コミュニティセンター中町集会所

所在地	中町1丁目28番5号	開館時間	9:30~21:30
開設年月日	昭和53年4月5日	休館日	年末年始、水曜
敷地面積	181.81㎡	延床面積	205.42㎡
主な設備	集会室、和室、大広間等		

② 利用者数の推移

ア 中央コミュニティセンター

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	175	223	307	306	307
総利用人数(人)	46,585	18,238	23,896	32,326	55,608
開館1日あたりの平均利用者数(人)	266.2	81.8	77.8	105.6	181.1

イ 中央コミュニティセンター中町集会所

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	294	223	307	306	307
総利用人数(人)	10,387	2,058	6,157	6,965	10,243
開館1日あたりの平均利用者数(人)	35.3	9.2	20.1	22.8	33.4

③ 主な事業

- ・ 中コミカフェ
- ・ フリーマーケット
- ・ ピンポンの日 等

(10) 西久保コミュニティ協議会

① 西久保コミュニティセンター 施設概要

所在地	西久保1丁目23番7号	開館時間	9:30~21:30
開設年月日	昭和52年1月22日	休館日	年末年始、第3月曜
敷地面積	1737.30㎡	延床面積	1433.77㎡
主な設備	会議室、料理室、親子ひろば、和室、茶室、学習室、ロビー等		

② 西久保コミュニティセンター 利用者数の推移

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	315	250	343	344	344
総利用人数(人)	85,442	11,685	20,271	31,565	48,655

開館1日あたりの平均利用者数(人)	271.2	46.7	59.1	91.8	141.4
-------------------	-------	------	------	------	-------

③ 主な事業

- ・ ナイトハイク
- ・ ショウタイム
- ・ 教養講座 等

(11) 緑町コミュニティ協議会

① 緑町コミュニティセンター 施設概要

所在地	緑町3丁目1番17号	開館時間	9:00~21:00
開設年月日	昭和61年10月18日	休館日	年末年始、月曜
敷地面積	586.55㎡	延床面積	543.88㎡
主な設備	会議室、調理室、プレイルーム、和室、音楽室、学習室、ホール等		

② 緑町コミュニティセンター 利用者数の推移

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	279	222	303	303	304
総利用人数(人)	27,149	3,586	8,025	8,810	12,966
開館1日あたりの平均利用者数(人)	97.3	16.2	26.5	29.1	42.7

③ 主な事業

- ・ グリーンカフェ
- ・ 卓球お楽しみ会
- ・ コンサート 等

(12) 八幡町コミュニティ協議会

① 八幡町コミュニティセンター 施設概要

所在地	八幡町3丁目3番16号	開館時間	9:00~21:00
開設年月日	昭和55年5月27日	休館日	年末年始、火曜
敷地面積	889.54㎡	延床面積	597.03㎡
主な設備	会議室、調理室、和室、学習室、ロビー等		

② 八幡町コミュニティセンター 利用者数の推移

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	281	223	307	306	307
総利用人数(人)	29,647	7,897	12,724	12,729	13,864
開館1日あたりの平均利用者数(人)	105.5	35.4	41.4	41.6	45.2

③ 主な事業

- ・ コーヒーの日
- ・ はちコミコンサート
- ・ Kids クラフト 等

(13) 関前コミュニティ協議会

① 施設概要

ア 関前コミュニティセンター

所在地	関前2丁目26番10号	開館時間	9:30~21:30
開設年月日	昭和56年5月11日	休館日	年末年始、木曜
敷地面積	991.00㎡	延床面積	790.20㎡
主な設備	会議室、和室、音楽室、学習室、ロビー等		

イ 関前コミュニティセンター分館

所在地	関前3丁目16番6号	開館時間	9:30~21:30
開設年月日	平成4年3月26日	休館日	年末年始、木曜
敷地面積	160.86㎡	延床面積	153.44㎡
主な設備	会議室、和室、集会室等		

② 利用者数の推移

ア 関前コミュニティセンター

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	279	101	253	307	307
総利用人数(人)	39,076	3,052	12,459	24,064	32,325
開館1日あたりの平均利用者数(人)	140.1	30.2	49.2	78.4	105.3

イ 関前コミュニティセンター分館

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	279	211	305	307	307
総利用人数(人)	3,804	1,331	2,000	2,459	2,541

開館1日あたりの平均利用者数(人)	13.6	6.3	6.6	8.0	8.3
-------------------	------	-----	-----	-----	-----

③ 主な事業

- ・ セタづくり
- ・ 関前ミュージックフェスティバル
- ・ パソコン教室 等

(14) 西部コミュニティ協議会

① 西部コミュニティセンター 施設概要

所在地	境5丁目6番20号	開館時間	9:30~21:30
開設年月日	昭和62年4月18日	休館日	年末年始、木曜
敷地面積	1248.00㎡	延床面積	1499.70㎡
主な設備	会議室、調理室、体育室、和室、茶室、学習室、ロビー等		

② 西部コミュニティセンター 利用者数の推移

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	278	223	299	305	326
総利用人数(人)	65,210	15,614	29,516	34,258	40,919
開館1日あたりの平均利用者数(人)	234.6	70.0	98.7	112.3	125.5

③ 主な事業

- ・ ちびっこ運動会
- ・ パソコンセミナー
- ・ 卓球の集い 等

(15) 境南コミュニティ協議会

① 施設概要

所在地	境南町3丁目22番9号	開館時間	9:00~21:00
開設年月日	昭和51年7月18日	休館日	年末年始、第1、3、5金曜
敷地面積	1862.00㎡	延床面積	1638.58㎡
主な設備	会議室、調理室、体育室、児童室、和室、茶室、学習室、ロビー、サロン等		

② 利用者数の推移

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	298	38	216	326	329
総利用人数(人)	65,526	637	24,138	44,476	48,044
開館1日あたりの平均利用者数(人)	219.9	16.8	111.8	136.4	146.0

③ 主な事業

- ・ スポーツ大会
- ・ セタまつり
- ・ モーニングハイク 等

(16) 桜堤コミュニティ協議会

① 施設概要

所在地	桜堤3丁目3番11号	開館時間	9:00~21:00
開設年月日	昭和57年3月27日	休館日	年末年始、火曜
敷地面積	390.21㎡	延床面積	360.42㎡
主な設備	会議室、大広間、ホール、ロビー等		

② 利用者数の推移

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
開館日数(日)	72	224	306	306	307
総利用人数(人)	4,326	4,559	5,647	7,478	9,948
開館1日あたりの平均利用者数(人)	60.1	20.4	18.5	24.4	32.4

③ 主な事業

- ・ 天体観測会
- ・ 人形劇
- ・ わなげ 等

第五期 武蔵野市コミュニティ評価委員会 報告書
(令和7年3月)

発行・編集

武蔵野市 市民部 市民活動推進課
〒180-8777 東京都武蔵野市緑町2-2-28
電話 0422-60-1830 (直通)